
IS【インフィニットストラトス】～復讐のフリーダム～

とある世界の思春期男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS【インフィニットストラトス】〜復讐のフリーダム〜

【Nコード】

N3670W

【作者名】

とある世界の思春期男子

【あらすじ】

織斑一夏の復讐劇。この世の汚物を排除するため、彼は今日も機体と共に生きる。世界最強の機体、MSと共に。

プロローグ

世の中は理不尽だ。少なくとも、俺はそう思う。

なぜただの一学生にしかすぎない俺がこんな目に遭わなければならないんだよ。

なぜ俺ばかりにこんな仕打ちが回ってくるんだよ。

……俺こと織斑一夏は誘拐され、今は薄暗い建物に閉じ込められている。

俺を誘拐したヤツは仲間となにか訳の分からないことを話しているようだった。

だが今の俺にとってそんなことはどうでもいい。

問題はなぜ俺がこんな目に遭わなければならないのか。

原因は知っている、俺の身近な二人の人物と一つの物体が原因だ。

俺の姉の織斑千冬とその親友篠ノ之束、そしてIS

織斑千冬

モンド・グロッシン

第一回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者。

公式試合では負けたこともなく、世界最強のIS操縦者としても名高い。

だがそんな名声を受けるようになったから俺の生活は変わってしまった。

世界最強のIS操縦者になってから皆が俺と千冬を比べるようになった。

もちろん、俺は千冬のように頭も良くないし運動もできるわけではない。

最も俺と比べる時点で間違っている。

だが奴らは言った……………言いやがった。

「世界最強の弟のくせして大したことはないな」

「お前はお前の姉さんと比べたら出来損ないだな」

「てつきりお前もすごいやつかと思ったのに。期待外れだ」

……………俺は絶対に忘れない、この屈辱と怒りと復讐心を。

お前らが勝手に比べたんだろうが。

お前らが勝手に俺がすごいと決め付けたんだろうが。

俺はあの人とは違う、俺は織斑一夏個人だ。

だがそんな俺の声に耳を傾けてくれる奴なんてほとんど存在しなかった。

ただ俺を嘲笑い、出来損ないだと決め付け、俺に暴行を加える。

時にはナイフで背中を刺されたこともあった。

たくさん血が出た。死ぬぐらい苦しかった。

だが誰も俺のことなんざ助けってくれようとはしない。

当たり前だ。どいつもこいつも俺に手出しをする連中の味方だったから。

篠ノ之束

ISの発明者であると同時に織斑千冬の親友。

コイツは気に入った奴しか興味を示さず、他の奴らの扱いはゴミと同じ。

ISを開発したため政府の監視下に置かれていたが、「白騎士事件」

が起こった直後に忽然と姿を消し今でも逃亡生活を続けている。
以外にもコイツは俺に千冬と同じような態度で接してきた。
だが、今思い返してみれば嫌な所に気が付く。
アイツもまた、俺の内面や外見を一切見てはいない。

恐らく千冬と同じ態度で接してきたのは、ただ単に俺が千冬の弟と
いうだけだろう。

そのためそれ以来はあまり俺に話しかけてきたりはしなかったし、
時にはうざったいようにあしらわれたりもした。

結局、天才に見下されたような形になっただけだ。

まだ凡人に見下されるよりはいくばくかはマシだった。

それでも許せない。

俺の人生を狂わせた二人目の人物。

許せるはずがなかった。

こんなにも生活を滅茶苦茶にされ、正直黙ってはいられない。

今すぐにでもアイツの喉笛を割いてやりたい気分になる。

IS

俺がこの世で一番嫌っている物体。

正式名称「インフィニットストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。

開発当初は全く注目などされてはいなかったが、「白騎士事件」以
降は従来の兵器をはるかに凌駕する性能が世界中に知れ渡ること
になり、今では軍事転用されるまでに。

おかげで世界は男の立場があつという間に弱くなってしまった。

今では法律なども女性の方がはるかに有利な物になっていたり、男
が無罪でも女が有罪と決めつけければ即有罪になってしまう世の中
になってしまった。

俺も何回か被害に遭っており、今ではその名前さえ聞くのが嫌だ。

コイツが生まれてしまったから世界のバランスが一気に崩れてしまった。

なのに作った本人はどこか人目のない所に逃亡中。

その親友は見ても見ぬふりを完全に決め込んでしまっている。すべてはこの三つが悪い。

他は何も悪くはない、もちろん俺も。

なのになぜ俺たち男がこんなつらい目に遭わなければならなかったのか。

なぜ女性が完全に強い立場の社会など築かれてしまったのか。

俺が何をした。

何故俺がこんなに苦しくて惨めな思いをしなければならない。

何故俺のことを誰も助けてくれない。何故誰も気にかけてくれない。

何故俺のことを見てくれない、何故俺とあの人を比べる。

何故俺を見下す。何故俺はここまで孤独なんだ。

何故俺はそんな生活を強いられなきゃいけなくなっただ。

他の男の人たちに関してもそうだ。

何故俺と同じく辛い目に遭わなければならない。

何故俺と同じく他人から見下されたり嘲笑われたりしなくてはならない。

何故それを周りの奴らは黙って見過ごしたりする。

そうだ……………全部アイツ等のせいだ。

この二人が……俺の人生を狂わせやがった張本人だ。
俺は許さない、この二人は絶対に。
復讐してやる、アイツらに目にものを見せてやる。

この世の中は腐っている……いや、腐りきっているといた方が正しい。

出来ることなら俺が今すぐにでもぶち壊してやりたい。
でも、今の俺にはそんな力なんてどこにもない。
悔しい、すごく悔しい。

今捕まっているこの状況も、ただ助けが来るのを待つしかない。
そんな自分がたまらなく惨めに思えてしまう。

何か力があつたら、あいつ等を引き裂いてやれるのに。
この腐りきった世界をブツ潰すことだってできるのに。
俺の嫌いな三つの物に………復讐してやれるのに！！

『ほう、復讐してやりたいか。なかなか面白いことを考える奴だな』

突如頭の中にとても高い声が響く。
辺りを見渡しても、俺を拉致した奴とその仲間しかいない。
なら幻聴なのか？

『幻聴ではない。貴様と今話している私は、貴様の内なる思いだ』

また聞こえた。

これで確信する、これは幻聴ではない。
だが内なる思いとは一体何だ。

俺はどうやって内なる心に返事を返せばいい？

『貴様が思うだけでいい。現に今も会話が成立しているはずだ。…』

……早速だが織斑一夏よ、力が欲しいか？他の物を圧倒する力が」

そんなもん欲しいに決まってるだろうが！！

「なら貴様はその力を使い、何をする？」

この腐りきつた世界を壊して、女性の地位を昔みたいに戻してやる！
そして……俺の大っ嫌いな汚物に復讐してやる！！

[illegible]

その瞬間、世界が変わったような気がした。

一瞬俺の体を光が包み、光がなくなった時には信じられないことが起きていた。

俺は……青いISを装着していたのだ。

『そいつはISじゃない、MSだ。絶対に一度しか言わないから良
く聞いておけよ……………その機体の名は……………』

パーフェクトフリーダムガンダムだ！！

パーフェクトフリーダムガンダム……それが俺の手にした力。
今この状況でも分かる。

このMSは世界で最強の機体だ。

俺の異変に気付いたのか、俺を拉致した奴らが騒ぎ出した。

「さあ、奴らに見せてやれ！！お前が手にした力を！！」

俺の中にある心が放った言葉。

それが引き金となり、俺は奴らを殺すために武器に手をかける。
ライフルらしきものを持ち、敵に向けて乱射する。

するとどうしたことだろうか。

敵が……さっきまで脅えて仕方なかった敵がゴミみたいに吹き飛んでいく。

あるものは上半身がなくなり、あるものは体そのものが消えた。
コイツなら……このパーフェクトフリーダムなら世界を変えられる。
そう確信した。

敵はあっという間に全滅、俺は騒がれる前にその場を去った。

数分後、俺を助けに来た者たちが見た光景は信じられないものだったという。

十人いた人間すべてが死亡。

しかもほとんどが上半身や下半身が吹き飛んでおり、無残な状況だったらしい。

だがそんなこと今の俺には関係ない。

さあ、今こそ誓おうか。

俺、織斑一夏は世界を壊し、ISも壊し、世界の歪む原因となった汚物を、何年かかったとしても、必ず復讐してやる！

主人公及び機体設定

織斑一夏

性別：男

年齢：16歳

身長：178センチメートル

容姿：かなりモテるイケメン

この作品の主人公。原作とは全く違い、ISの操縦の腕前はダントツの世界トップ。

また頭もかなり良くなり、今では束と真正面からやりあえるぐらいに。

ISのコアなども自作で作れたりするが、ばらすと騒がれるので隠している。

自分や他人を見下すような奴は大嫌いで、場合によっては普通に半殺しや殺害をしたりする。

性格はかなり悪い方向にいており、千冬や束は敵としか見ていない。

事件の後は、今まで通りの生活を送っているが明らかに口調が乱暴になったりしている。

その後は原作と同じく高校受験の会場を間違え、ISに触って起動させたところを警備員に見つかりIS学園に強制入学させられてしまう。

だが本人は逆に好都合だと内心喜んでいたりしなかったり。

ちよつと間抜けなところや鈍感なところはあまり変わってはいない。この作品では白式を使うことが多いが、ピンチになったりするとパーフェクトフリーダムを使って敵を駆逐する。

本人は自分のことをあまり強いとは思っていない。

近距離、中距離、遠距離全てにおいて得意。

それがきっかけで後に『青天の鬼神』と二つ名を付けられることに。

機体設定

専用MS、フリーダムガンダムオーバーカスタム

製作者：????（不明）

世代：????世代型 ????世代型

待機状態：青いサファイアのようなペンダント

一夏が貪欲に力を求めた際に現れたMSで日本語では『完全な自由』と呼ばれる。

機体のベースはフリーダムガンダムだが、GNドライブ（太陽炉）が二つ搭載されていたりするので性能はストライクフリーダムやダブルオーライザーを有に超えている。

GNドライブから発生する粒子の色は青色、本来なら積まれている核エンジンは不要だが一夏がより強力な機体にするために取り外さずにGNドライブと融合させた。

おかげで十個ほどのリミッターをつける羽目になり、五個以上外した状態で戦えば相手に生命の危険がある。

現在は一次形態だが、後半になれば二次移行もする。

またトランザム状態の時は自由に粒子化することができる。

現時点で最強のMSだが、後半は更に進化させる……………予定。

当然だがこの機体の存在は一夏以外は誰も知らない。

機能

『GNドライブカスタム?』

：「GUNDAM NUCLEUS DRIVE（ガンダムの中核のドライブ）の略称で通称『太陽炉』」に元々フリーダムに積まれていた核エンジンを融合させた代物。

ガンダムの根幹を成す重要な動力機関。

重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させ、陽粒子と光子（GN粒子）を発生させることにより、寛大なエネルギーを半永久的に得ることができる。

出力の割に小型化が容易であり、排熱量の低さから隠密性にも優れる。

核エンジンを搭載したことにより粒子の色が緑から青に変化、出力も本来の出力の二倍以上に跳ね上がった。

だがリミッターを掛けているため、本来の出力しか出ていない。

『トランザムシステム』

：オリジナルの太陽炉に組み込まれていたシステム。

機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することにより、一定時間スペックを5倍以上に上げることができる。

しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下するなど、諸刃の剣だった。

だが核エンジンをGNドライブに融合させたことにより機体性能低下は50パーセント抑えることができた。

こちらもありミッターを掛けているため、本来の性能ほどしかない。

トランザム発動後の機体は赤く発光し、移動によって残像を発生させるが、これは装甲内に流れるGN粒子の赤色化と、量の増大によ

るものである。

武装

『GNソード?』x2

：ガンダムエクシアのGNソードの発展版。
形状はGNブレイドによく似ている。

刀身を軸回転させグリップの角度を変えることでライフルモードに変形する他、銃口からビームサーベルを発生させることも可能。
両脚に2振りを装備する。

『MA-M01 GNラケルタ・ビームサーベル』

：GNドライブからの核粒子エネルギー補給により、かなりの威力を誇り刃渡りの長いビーム刀を形成することができる。

また2本のビームサーベルの柄同士を連結させ「GNアンビデクス
トラル・ハルバード」と呼ばれる両端からのビーム刀を出力する形態で使用することも可能。

近接戦では心強い装備の一つ。

『GNバスターライフル?』x2

：従来のビームライフルよりも圧倒的な破壊力を誇る遠距離用武装。
核粒子エネルギーを集め、それを圧縮して放つためシールドエネルギーが減る心配性は全くなく、かなりの破壊力がある。

判断を誤れば簡単に人を殺やめられるため取り扱う際は慎重にしなければならぬ。

またストライクフリーダムのように、2丁のGNバスターライフルを連結させ相手を狙撃することも可能になっている。

『M100 GNバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲』

：背部ウイング内に計2門装備された高出力ビーム砲。

1門でランチャーストライカーのアグニに匹敵する威力と射程距離を誇り、パーフェクトフリーダムの中では最大の破壊力を有する武装。

本来のフリーダムの場合、膨大なエネルギー量が必要なため乱用は出来なかったが、GNドライブカスタム？を搭載したことにより連発可能になった。

ただそれでも3連発が限界なため、迂闊に連発は出来ない。

『MMI-M15 GNクスイフィアス・レール砲』

：両サイドスカートに設置されたレール砲兼AMBACユニット。

小口径の弾丸を高速で連射することでランチャーストライク並の火力と携行弾数の多さを両立している上に速射性が非常に高い装備。

一斉砲撃時にのみ機体正面に展開され、普段は三つ折りの状態で腰部左右AMBACユニットとして装備されており、機体の姿勢制御に関わっている。

下部にスラスタ兼ダクトを備えており、推進器としての性能も持つ。

サイドスカートにはビームサーベルラックの機能も備え、ラケルタ・ビームサーベルは、非使用時にはここにマウントされている。

主人公及び機体設定（後書き）

次回から本編が始まります。

第1話

今俺は、IS学園の1年1組の教室にいる。

本来なら俺は藍越学園の入試を受けて入学するはずだった。

そう………入学するはず………だった。

それが俺のすっかりミスでこんな魔窟に入学する羽目になってしまった。

今になってこれほど我が身と日本政府を恨んだことはない。

「なんでIS操縦できる男が俺しかないんだよ………」

実際のところ、今日の朝まで俺はここに入るのを楽しみにしていた。というのも俺の目的に少しながら近づくことができるからだ。

だが俺はハッキリ言っているんな意味でおバカだ。

一つ、俺にとっての大きな問題を忘れてしまっていたのだ。

そう、世界でISを使える男が俺だけだという事実を完全に忘れてしまっていた。

もともとISは男が使えない設定の欠陥機。

俺が持っている機体、パーフェクトフリーダムはISではなくMSだということを完全に忘れていたため俺以外の男でも使える奴はいらぬと思ひこんでしまっていた。

俺自身もISに乗れるかと思っていなかったからつい迂闊に触つて起動させたところを警備員みたいな奴らに見つかった………という流れ。

正直な話、俺のミスが立て続けに続いたような形に。

だが今更ここを退学するわけにもいかない。

そんな事を言っても政府のお偉いさん方が俺のわがままなど許してくれるはずもない。

最悪の場合はISに乗って脅しにでも来るだろう。

…………… 止めよ。一瞬いいかもと思っただが今はまだ期じゃない。

もう少し…………… 俺がここを卒業した後にも行動を起こそう。

だが今の俺にはそれよりも耐えがたいものがある。

「なんで俺の方ばっか見てんだよ」

周りにいる女子は眺めているだけで話しかけてこない。

どうせ俺みたいな男が珍しいから見ているという感じだな。

だがいくつか少ないが俺を敵視するような視線を感じられる。 どうせ俺がIS…………… じゃない、MSに乗るのが気に食わないのだろう。

しかも一人か二人ぐらいは明らかに俺を見下している。 そういう考えを持つ奴らを見ていると俺は殺したくなって…………… 半殺しにしたいなってくる。

今すぐにも喉笛を割いてやりたいところだが我慢我慢。

最悪代表候補生だった場合はその国を敵に回すことになってしまう。 そうなったら全員駆逐するのに骨が折れる。

っていうかいつになったら担任がくるんだよ。 さっさと来いや。

「全員揃ってますね。 それじゃあSHRはじめますよー」

俺が心で呟いた瞬間、一人の女性が入ってきた。

ここの担任なんだろうがずいぶんと童顔だな。

本人には言わないけどな。

どうやらあの童顔の先生は副担任の山田真耶と言つらしい（自己紹介で聞いた）。

見た目だけで見ると本当に俺たちの同世代ぐらいにしか見えない身長。見ていた感じだと子供が無理に大人の服をきたみたいな感覚がある。

しかもかけている眼鏡もやや大きいのかどうか分からないが微妙にずれている。

別の眼鏡を思わず渡しそうな感じになつてしまうのは俺だけなのか！……………はいすいません、思つてるのは俺だけみたいですね。とりあえず今は集中して話しても聞いておいた方がいいだろう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

「はい。 よろしく願ひします山田先生」

「へ、返事を返してくれたのは織斑君だけですか……………」

教室内は変な緊張感が漂つており、俺以外は返事を返さなかった。それとそこの女子、何故俺にすごいみたいな目線を放ってくる。というかお前ら全員俺を見る前に返事の一つぐらいしろ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。 えっと、出席番号順で」

予想外の反応に先生はちよつとろたえている。

さすがにフォローする気にはなれず俺は黙って前を向くことに。
正直な話、俺もクラスメイトで俺以外が全員女なので余裕はあまりない。

今すぐここから逃げ出したい気分にもなっているのだから。

「（さすがにこれは……………冗談抜きできついぞ……………）」

クラスメイトすべてから俺への視線を感じる。

しかも俺の席はよりにもよって真ん中&最前列。　ちょっとした悪意が感じられる。

これでは目立つのは当たり前だ。

「……………くん。　織斑一夏くんっ」

「……………っと。　すみません、何の用でしょうか？」

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。　お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

ぺこぺこと頭を下げる山田先生。

何故だかこちらが悪いことをした気分になる。　……………いやまあ、

俺が話聞いてなかったのがすべて悪いんだがね。

「自己紹介ですか？　……………すみません、別の事に集中していて気がつきませんでした。　本当にすみません」

一応謝ってから席を立ち、後を向いて

「織斑一夏だ。世界で初めて男でISを扱える者だが、普通に接してくれ。好きな物は普通の日常と自由と気軽に話しかけてくれる友達。嫌いな物は他人を見下す愚か者と他人と自分、もしくは他人と他人を比べる奴だ。至らぬ点はいくらでもあるだろうがそんな時はサポートしてほしい。これから一年間、よろしく頼む」

俺が自己紹介をし終わると、なぜか拍手された。

しかも所々に頬を赤く染めている奴もいる。深追いは禁物だろう。

突如、急に背後からの攻撃を察知する。

素早く反応しそいつの腕を掴み、手刀を叩きこもつとするが……中斷する。

「ほう、担任に向かって手刀とは随分な挨拶だな織斑」

「な、なんでお前がこんな場所に………」

パアンツ！ いきなり出席簿で頭をシバかれた。

「年上、しかも担任に向かってお前と呼ぶな。それにさっきの自己紹介は何だ？」

「アンタには関係ないだろうが。それに俺は自分の本当の気持ちこそ自己紹介で言っただけだ。アンタにとにかく言われる筋合いはこれっぽっちも無い」

ヒュンツ！ ガシ！ 再び出席簿が襲ってくるが、今度はきつちりと掴む。

というかなぜ俺が攻撃されなきゃならない！ 理不尽すぎるぞこの

世の中は！

「ふん、今度は受け止めたか」

「あ、あの……織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「おやおや、鬼神は一体どこへ行かれたんだ？」

「どこかの魔法使いにでも封印でもされたのかい？」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと………」

さっきの涙声はどこへやら、副担任こと山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任のあの女へと応えている。

「……ちよつと待て。あの鬼神が……俺の担任だと？」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

素晴らしいぐらい身勝手な暴力宣言。

だが教室内は困惑のざわめきじゃなくて、黄色い声援が響いた。

「キャ
！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

お前らバカだろ。

あんな奴のどこに憧れるんだよ。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千冬はきやいきやいと騒ぐクラスメイト達を見てうつとうしそうな顔で見る。

そんなに嫌ならさつさと別の職についてくれ。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。 感心させられる。 それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

知るかよそんな事。

さつさと俺の目の前から消え失せろ。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

クラスメイトもバカばかり。

これじゃあ先が思いやられるな…………ハアッ。

そんなことを思う俺は内心驚愕と絶望という感情が渦巻いていた。

理由は俺の目の前の人物、織斑千冬が原因なのだが。

「で？ まともに挨拶も出来ない上に口答えまでするのか、お前は」

「うるせえよ。 誰がお前に敬語なんか使うか」

パンツ！ 本日二回目となる出席簿アタックを喰らった俺。
お前のせいで脳細胞が一万個ほど死滅したじゃねえかよ。

「敬語はもうこの際どうでもいい。 だがここでは織斑先生と呼べ」

「……………チツ、織斑先生。 どうだ、これで満足か？」

俺は睨みながら渋々要求に従う。

だがこのやり取りがまずかったとすぐに俺は気が付く。
だが今さら気付いた所で後の祭り、俺とアイツとの関係が教室中に
バレた。

「え……………？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……………？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、そ
れが関係して……………」

「ああつ、いいなあつ。 代わってほしいなあつ」

俺も今すぐお前と立場を変えてほしいよ。
ていうか今すぐ担任を変えてほしいよ。

「なんだ織斑？ 私が担任なのがそんなに不満か？」

「不満しかないに決まっている。出来れば今すぐ別のクラスの担任をしてくれ」

パアンツ！ 本日三回目の出席簿アタックが俺の頭に炸裂した。

第2話

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したISを運用した場合は、刑法によって罰せられ」

時間は一時間目が終わった次の授業の時間、すなわち二時間目。この時間もISとやらについての勉強だ。すらすらと山田先生は教科書を読んでいく。

もちろん俺は授業などというものにはついて行けている………といつか3年の内容も暗記して意味も全部分かるからハッキリ言っても仕方がない。だから俺は教科書を開けてすらいない。

「………こんな初めっからやるとか一種の拷問だろ………」

少なくとも俺はそう感じる。

俺の目の前にどっかりと積まれた教科書五冊。その一番上のものをぱらりとめくる。

意味は分かるが………駄目だ、見ていて頭が痛い。

正直今すぐ捨てて、燃やしたい。もしくは今すぐ引き裂きたい。

「（俺だけなのか？ みんなこんなの初めっからやって気が動転したりはしないのか？ 正直今俺この教科書見たせいで頭痛がしてきたんだが………）」

隣の奴を見て見るが先生の話聞きながらノートを取っていた。取らないといけないような内容か？………と思ってしまうが、心の

奥にしまう。

「（しかし、このIS学園に入る奴つてのは事前学習してると聞くが……………どうやら本当みたいだな。ハッキリ言って尊敬に値するぜ）」

不真面目な自分が少しだけ恥ずかしくなってしまうが、いまさらやろうという気は湧かない。

それどころか今すぐにでも眠りたい。夢の世界に逃げ込みたい。つてそれはさすがに出来ないか。鬼教官がいるから。

「ね、ねえ……………ノートとらなくて大丈夫なの？」

案の定、不真面目な態度をとっていた俺に隣の女子が訪ねてきた。その表情からは緊張しているが、俺のたを思ってくれていることが分かる。

こういう友達を、俺は小学生の時から欲しかったよ。

危うくトリップしかけた俺は、少し笑みを含んで返事を返す。

「大丈夫、授業は分かるから。それに俺、教科書読んでたら頭痛がしてきちゃってさ。悪いな、真面目にやってたのに。それと心配してくれてありがとう」

「そ、そうなんだ……………頭痛いなら早めに保健室に行ってね」

「ああ。授業に集中しよう、山田先生に怒られる」

「そうだね」

俺の言葉を聞いて、その女子は笑いながらノートに視線を戻す。

心なしか、頬が少し赤みを帯びているように思えてしまい仕方がない。

俺何か恥ずかしがるようなことをやったのだろうか？

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

俺と隣の女子のやりとりに気付いた山田先生が、わざわざ訊いてきた。

いや、別に全部分かるんですが。

「山田先生、何故俺にそんなことを聞くんですか？」

「え……………お、織斑くんが教科書やノートを一切開いてないから。その、何かわからないところがあるのかなっと思ってる」

「いや、教科書の内容はすべて分かってるんですが」

「じゃ、じゃあ何故一切教科書を開いてないんですか？ も、もしかして私の授業が全く面白くなかったから……………」

今にも泣きだしそうになる山田先生。

そりゃあ授業を面白いとか言うやつはよっぽど頭がおかしいんだろう。

とりあえず何かフォローをしなければ。

「いや。俺が教科書を開いてないのはですね…………え……その…………あの…………」

ついつい言い淀んでしまう。

だって理由が『教科書見てたら頭痛がするから』だぜ？ 他の教師

たちはそれを許してくれたとしても千冬は絶対に許さないだろう。ほぐら、ターミネーターのBGMが頭に直接響いてきた。

恐る恐る下げていた顔を上げると……………やっぱりいました、織斑千冬。

「織斑。何故授業をちゃんと受けない？」

「お前に言う義理はねえよ織斑先生。それに俺は内容はちゃんと理解している。だったら別にやろうがやるまいがどっちでもいいだろうが」

「ほお……………内容は理解しているのか。なら何故授業を受けない。理由によっては貴様に鉄拳の制裁をくれてやる」

いるかクソ野郎。

だがここで何も言わなかったら出席簿アタックどころか鬼の鉄拳が来る。

……………いいだろう、言つてやるよ！！

「教科書見てたら頭痛がしたからだ。これで文句なんかねえだろ、ああ？」

ゴキンツ！ おれの頭部から鈍い音が響き渡る。

理由は簡単、千冬が俺の頭をマジで殴りやがったからだ。

「そんな下らん理由が認められるか。さっさと教科書を開け、馬鹿者」

「お前の指図なんぞ受けるつもりはない」

パシッ！ 今度は出席簿が落ちてきたが難なく受け止める。
千冬の表情は爆発寸前まで来ているくらいだった。
正直、そんな顔で睨まれたくない。

「分かりましたよ、やればいいんでしょやれば」

こうして俺は折れることになった。

この後は特にハプニングもなく二時間目が終了した。

授業は終わった瞬間、俺は頭をすぐに抑える。

にぶい頭痛に襲われてしまい精神が参ってしまったという感想を
言っておこう。

「ちょっと、よろしくて？」

「はあ？」

二時間目の休み時間、いきなり声をかけられ俺は素っ頓狂な声を出す。

いきなり話しかけられると誰でもこうなるだろ？

まあそんなことは置いといて、俺は声をかけた奴の方を向く。

「（うわ）……………めっちゃ殺したいタイプだ」

俺に話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子。

その全身からは高貴なオーラが出ており、雰囲気も『今の女子』という感じ。

「（こういうタイプは男をすぐに見下すからな）」

今の世の中は、ISという汚物のせいでかなり優遇されている。
今では女「偉い」という馬鹿げた構図が出来上がってしまった。
まあいずれは俺がそんな馬鹿げた世界なんて壊してやるがな。

「訊いてます？ お返事は？」

「訊いてねえ。俺はお前が嫌いだ、殺したい程にな。さっさと失せろ」

俺はキレ気味でそいつを睨む。

向こうも一瞬止まったかと思うと、俺を睨み返してきた。

「な、なんですそのお返事は！ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではなくて？」

「相応の態度をされたいのならその人を見下した態度を止めてから来な。それに俺はお前のことなんかこれっぽっちも知らない」

正直、こういう奴は殺すに限る。だがここは我慢我慢。

俺の答えは目の前の奴にとっては気に入らないものだったらしい。
釣り目を細め、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「お前みたいな奴が代表候補生なのか。随分とイギリスも人手不足みたいだな」

ちなみに代表候補生とは、国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるいわばエリートみたいな奴の存在を示す。コイツがエリートだと言われたら俺は吹き出しそうだ。

「あ、あなた！ わたくしの祖国を侮辱する気ですの！？」

「あゝ……違うな。イギリスが悪いんじゃないな。お前の方に色々と問題があるんだな。すまないな、お前が悪いのにイギリスを悪く言っちゃまって」

「あ、あなたねえ！ 本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡、すなわち幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけるかしら！！」

「それはラッキーだな。俺以外の人たちにとっては」

「……………さつきから聞いていれば、あなたはわたくしのことを馬鹿にしていますの？」

「馬鹿だしな、実際」

おうおう、怒りで顔が真っ赤だ。

「全く……………世界で唯一男でISを操縦できると聞いてましたから、少しぐらいはマシなのかと思っていましたけれど、期待外れですわね」

「お前が勝手に期待してただけだろう。 幻滅されても困る」

「ふん。 まあでも？ わたくしは優秀ですから、 あなたのような非常識で野蛮な人間にも優しくしてあげますわよ」

「雑魚が優秀ってか。 もうちょっとマシな嘘を付くんだな」

「ざ、ざ、雑魚ではありませんわ！ 何せわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですわ！ 貴方こそ雑魚じゃありませんの！？」

「あんな奴、誰でも勝てるだろう。 俺も勝ったしな」

あんな突っ込んできてかわしたら勝手に壁にぶつかってそのまま動けなくなるような教官は誰でも倒せて普通。
しいて言えば俺はかなり幻滅したな。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「どうせ女子だけってオチだろう」

ピシツとなにかヒビが入った音が聞こえたが気にしない。
何故かセシリアがプルプルと震えているが気にしない。

「つ、つまりわたくしだけではないと……………」

「俺が知るわけがないだろうが」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言っの！？」

「たぶんな。それと静かにしろ、他の奴もいるんだぞ」

「たぶん！？ たぶんってどういう意味かしら！？」

「うるさい。一回落ち着いたらどうだ？」

「こ、これが落ち着いていられ」

と、ここで休み時間終了のチャイムが鳴った。
ナイスタイミングと思わず心の中で叫んでしまう。

「っ……………！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よく
つてー！？」

「うつさい。もう二度と来るな」

ようやく静かになり俺は大きなため息を付く。
だが、この後更に面倒事はかさなることなど俺は予想もなかった。

第3話

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

この3時間目は何故か織斑千冬が教壇に立っている。

この瞬間から嫌な予感がぶんぶんするが、いかんせん逃げられない。逃げたら絶対にキツイ罰則が与えられるのは目に見えているからだ。どうせグラウンド100周とか無茶なことばかりだろうが。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

千冬が思い出したように言った。

……………なぜだろう、嫌な予感ばかりしてきた。
大抵こういう時の俺の予感は当たる。

出来れば今回の予感は何が何でも外れてほしいものになりそうな感じだ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると1年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

要約すれば面倒なことばかり押し付けられるのだろう。

なった奴はご愁傷様とねぎらってやりたいところだが……マジで嫌な予感しかない。

まさか……………俺が指名されるとかそういうオチはないよな？

「はいつ。　織斑くんを推薦します！」

うわあ！　やっぱり俺の予感が的中しやがった！！

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏……………他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

冗談じゃねえよ！　何で俺がそんなめんどくさそうなことをしなきゃならんのだ！

絶対に拒否してやる！

「ふざけんな！　なんで俺がそんな事をしなきゃならないんだよ！」

「織斑。　席に着け、邪魔だ。　さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」

「うるせえよババア！　テメエになんざ言ってねえ！　黙ってる！」

「……………」

バシンバシンバシンバシンッ！　まさかの5連続コンボだった。

脳細胞がこの日だけで4万ぐらい死んだ。

「自薦他薦は問わないと言った。　他薦されたものに拒否権など無い。　選ばれた以上は覚悟をしろ。　分かったな、織斑」

畜生！ 誰でもいいから名乗り出てください！！

「待って下さい！ 納得がいきませんわ！」

おお！ またしても俺の願いがかなったぞ！！
つてちよつと待てよ。 この声って確か……………

「そのような選出は認められません。 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……………なに言っただコイツ。 なんでこんなに偉そうなんだ？
何故また俺がこんな小娘に見下されなければならない……………。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。 それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サ―カスをする気は毛頭ございませんわ！」

……………いい加減にしろよ、オイ。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

……………どこまで……………どこまで人を見下す気なんだ、お前は。
ああ……………殺してやりたい。 今すぐにも殺してやりたい。
たい。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自

体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

ブチン。 もう……………我慢しきれねえなあ……………。

「いい加減にしろよ、態度だけでかい雌豚が。 そんなに気に入らないなら今すぐ荷物をまとめてイギリスに帰れ。 お前がいると迷惑なんだよ。 それにイギリスも対して日本と変わんねえだろうが」

俺は我慢しきれずに言ってしまう。

だが構うものか。 コイツは……………こんな奴は気に食わない。

セシリアはよっぽど怒っているのか顔が真っ赤になっている。その汚い面は正直言つて二度と拝みたくない汚物だ。

「あ……………あなたねえ！ わたくしとわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「テメエが先に言いだしたんだろうがこの雌豚。 いいからさつさと失せろ、その薄汚え面見てたら俺や他の連中の気分が悪くなってくる。 所詮古いだけが取り柄の屑みたいな国の代表候補生つてのも屑みたいだしなあ」

「もう我慢できません！ 織斑一夏、あなたに決闘を申し込みますわ！」

セシリアが机を叩いて俺を睨みながら宣言してきた。

ハッキリ言つてあんな雌豚ごときが俺の相手になるとは思えない。さつさとイギリスとかいう屑の国に帰ってほしい。

「テメエみたいなのが俺の相手になるとか思つてんのか？ 妄想も大概にして現実見た方がいいんじゃないかねえのか、屑みたいな国の代表

候補生さんよお」

「キー！ 言わせておけば！ 言っておきますけど、わたくしとの勝負に負けるようなことがあったらわたくしの小間使いいえ、奴隷にしますわよ！！」

「おいおい、今の時代に奴隷とか頭おかしいんじゃないのか？ ハハ、さすがは井の中の蛙ということわざが似合う雌豚だ。そんなに奴隷が欲しいなら過去の時代にでも遡って奴隷商人にでもなっていやがれ。 さぞかし似合うだろうよ、雌豚さん。 まあ、そこまで言うなら仕方なく勝負をお受けしてやるよ」

俺にボロクソに言われ、更に真っ赤になるセシリア。
ゆでダコみたいで実に面白い。

ああ、違うな。 アイツは色白な雌豚だったな。

「織斑、そこまでにしておけ。 それで両者は決闘することを認めるんだな？」

「当たり前ですわ！」 「面倒くさいが乗ってやるよ」

仕方なしに了承してやる。

だが真面目にやるのもだるい。 そうだ、ハンデ付けるって言えばいいか。

「ハンデはどのくらいにすればいいんだ？」

「あらあら、あれだけ大口をたたいておきながら早速お願いですの？」

「アホか。 お前と俺じゃあ勝負にならん。 俺がハンデをつけてやるって言ってるんだよ」

そこまで俺が言っているとクラスから爆笑が巻き起こった。
……………俺、なにも面白いことなんか言ってるぞ。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

「織斑くんがハンデを貰った方がいいんじゃないの？」

ああ、こいつ等も全員馬鹿だったのか。

「お前ら馬鹿じゃないのか？」

俺がそう言つと、クラス中が静まり返った。
そして俺を敵視するような視線で睨んで来やがった。

「織斑くん、それってどういう意味？」

「分からないなら説明してやる。 今まで男が弱かったのはISに乗れなかっただろ。 それでお前らは男が必ず女と戦えば弱いと思っ込んでんだよ。 だが俺はIS（正確にはMSだが）に乗ることも戦闘を行うこともできる。 これで条件は同じになっただろ」

俺の言葉を理解したのか、ほとんどの人間が落ち着く。

だがやはり納得していない奴らもいるみたいだ。

「それはそうかも知れないけど織斑くん、相手は代表候補生だよ？ 織斑くんがISに乗れたのって最近でしょ。それじゃあいくらなんでも勝ち目がないよ」

「さあ、どうだろうな。少なくとも俺は自分は男より偉いと思うてる雌豚なんかに負ける気はしないがな。それじゃあもうお互いにハンデ無しでいいだろ。結局はその決闘とやらで勝った方がそいつより強い、そういうことだ」

どうやら全員納得したみたいだ。

一匹の雌豚らしき汚物を除いての話だが。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

千冬が何かいい感じに締めくくり、授業が始まる。せいぜい俺が楽しめるくらいにはあの雌豚に足搔いてもらいたいのだ。

アイツが俺に勝つなんてことは天地がひっくりかえってもあり得ないがな。

第4話

「ああ、織斑くん。　まだ教室にいたんですね。　よかったです」

時刻はもうすでに午後、つまりは放課後タイムだ。

ここ最近疲れがたまっていたのかどうかは分からないが、いつの間にか寝ていて気がつけばクラスメイト全員が帰っていたというこの状況。

訂正しておくが授業が終わってから寝たのであつて授業中では寝ていない。

あのクソババアがそんな生徒を放っておくはずがないだろう。

まあとりあえずそんなことは置いといて今の状況を補足。

俺が眠りから覚めて、荷物をまとめて帰ろうとしたところに山田先生登場。

我ながらつくづく運がないことを身をもって実感した瞬間だ。

「（さつさと帰って寝たいんだが仕方がない。　とりあえず要件聞いて帰るか。）はい、山田先生。　俺に何か用があるんですか？　俺もう帰って寝たいんですけど」

「え〜と…………織斑くん、もしかして怒ってます？」

「今はまだ怒ってませんけどあんまり時間がかかるようなら怒りますよ。　それで山田先生、要件は一体何でしょうか？」

「え、え〜と…………織斑くんの寮の部屋が決まっただんです」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーを渡してきた。

ここISS学園は全寮制。　生徒はすべて寮で生活を送ることが義務

づけられている。

なんでも将来有望なIS操縦者達を保護するという目的があるらしい。

他の国の奴らも来ているから、何かあったら国際問題に発展するのだと。

超過保護もいいところだ。自分の身ぐらい自分で守ると言いたい。

「理由が分かりかねますね。俺の部屋はまだ決まっていなと聞かされていたし、一週間は自宅から通学してもらうと言われていたんですけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

「いいえ、全く持って聞かされた覚えがありません」

最後の方だけ俺だけに聞こえるように耳打ちをしてきた。

どうせ今まで前例のない『男のIS操縦者』だから、国の方が保護と監視の両方を行うために、今回みたいなことをやらしてくれたのだろう。

俺のことをニュースで流しやがったから、あの子の対応には困ったんだぞ。

また今度お礼でもしに行こうかなあ。

「そう言う訳で、政府特命もあつて。とにかく寮に入れるのを最優先にしてみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「いやいや。山田先生、そうは言いますがね。俺はこれでも十

六歳の男子です。 幸い俺は女なんかに興味は全くありませんが、向こうはどうですかね？ それに年頃の男と女と一緒にするって世間的にオーケーなんですか？」

「え！？ え」と……………それは……………その……………」

山田先生が何やらトリップしている。 戻ってくるには時間がかかるかもしれない。

それと廊下にいる女子、なんでこっちを見ながらひそひそと話しててるんだよ。

言いたいことがあるなら面と向かって言えやゴラァ！！

…………… ってそんなことしてる場合じゃねえ。 家帰って荷物を持って来ねえと。

「まあいいですよ。 とりあえず一回家に帰らせてもらいます。 荷物を持ってもう一回ここに帰ってくればいいんですよ？」

「あ、いえ、荷物の事なら」

「私が手配しておいた。 ありがたく思え」

聴きたくない声が俺の脳内に響く。

仕方なしに後ろを向くと、やっぱりいました織斑千冬。

後思うが何故毎回このババアと会うたびにターミネーターのBGMが流れるのだろう。

もはやコイツを珍獣として登録するのも悪くはないかもしれない。

「全く、余計な事をするのに関しては一人前だなクソババア。 何勝手に人の生活必需品とか家から運び出してくれてんだよ。 まさかとは思うがお前の手で触れたりとかしてないよな？」

「残念ながらお前の物に手を付けたのは私だ。それなのに手で触れていないかと質問するのはおかしいとは思わないのか？」

「思っわけねえだろうが。ちなみに、中に何入れた？」

「生活必需品だけだ。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「タバコと酒は持って来てねえのか？ 普通は持ってくるだろうがよお」

「お前は今学生だぞ。そんな物を使用していいと思っているのか？」

「俺が何をしようがお前には関係ないし何かを言われる義理もない。黙ってる」

俺は千冬が持っている生活必需品などを引っ手繰る。

あゝあ、マジでタバコと酒が入ってない。仕方ない、後で買ってこよう。

「じゃ、じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……その、織斑くんは今のところ使えません」

「はあ？ 何で俺だけ入れねえんだよ？」

風呂に入れないなど残酷すぎる。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「別に入ればいいじゃねえか。俺は女なんてもんに興味はねえから問題なんて起こらねえよ。それとも何か、外で温泉にでも浸かってきていいのか？」

「認めるわけないだろうが、そんなもの」

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だつ、ダメですよ！」

「俺は風呂に入りたいだけです。女子なんかに興味はありません」

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような」

駄目だ、山田先生は色々な意味でおかしい。

ちゃんと人の話とかをもっと聞いてほしいと思う。

「……………なんか疲れたんで、俺もう行きますね」

「あ、はい！ えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで失礼しますね。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

この近い距離でなぜ道草などくう必要があるのだろうか。やっぱり、山田先生の言うこととかあんまり分らない。

まあとりあえず今日は寝たい。色々とありすぎた。

「1025、1025と……………どうやらここみたいだな」

俺の部屋番号と一致していることを確認し、ドアに鍵を差し込む。だが、ここで不意に気付く。ドアのかぎが掛かっていない、すなわち空いている。

どうやら俺と同室の奴が先に入ってるみたいだな。

いざ部屋に入ってみると、なんと豪華なことか。

そこいら辺に立っているビジネスホテルよりもよっぽどいい。

だがやはり家にいるのが一番だという気持ちは変わらない。

別に俺は引きこもりではない。念のために言っておく。

「誰かいるのか？」

俺が荷物を隅の方に置いた瞬間、奥の方から声が聞こえてきた。声が曇っている辺りから推測した結果、恐らくシャワーを浴びているみたいだ。

全室にシャワーがついているらしいから。……………ってあれ？

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

なぜだろう。すごく嫌な予感がまたする。

多分今回のも当たるんだろうなあ……………。

「こんな格好ですまないな。 シャワーを使っていた。 私は篠ノ之」

「 簞」

シャワー室から出てきたのは、六年前に別れた幼馴染の篠ノ之簞だった。

だが今はそんなことが問題ではない。 今置かれているこの状況がまずい。

向こうはシャワーを浴びていて、俺が入ってきたのを感じて挨拶しに出てきた。

だが男の俺とは思っていなかったのだろう。 簞はバスタオルを一枚巻いただけの姿、ざっくり言えば全裸だった。

普通の女子ならいい。 別に恥ずかしがって終わりだろう。だが…… 簞の場合はそうはいかない。

「

……」

「

……」

沈黙、お互いに見つめ合ったまま沈黙。

多分、俺達二人とも驚いて思考がおかしくなっているのだろう。今もこうして平然を装ってはいるが俺も焦ってるんだぜ。

「い、い、いちか………？」

「あ、ああ。 そうだ、織斑一夏だ」

俺がうなずくと箒は顔を真っ赤にした。

シャワーから出てきていきなり俺がいたらビックリもするだろうし、恥ずかしくもある………みたいだな。俺知らんけど。

「っ……………！？ み、見るな！」

「ああ、すまん。すぐに後ろを向く」

俺は横に顔を逸らす。

俺はいきなりの事態に少々ビックリしてしまっただけで、もう今は落ち着いている。

向こうは未だ真っ赤のままだろうが。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる……………？」

「いや、俺のここの部屋なんだが」

そっからの展開は異様に早かった。

箒は木刀を手にとると、俺の方に向かって構える。

そして居合を一気に詰め、俺の頭めがけて木刀を振り

「ってそんなことされたら俺が死ぬだろうが！！」

間一髪のところでは俺は木刀を避ける。

だが箒はすぐに木刀を構え、俺との間合いを詰め斬りかかる。

俺はそれを避ける。斬りかかってくる。避ける。

こんな押収はかれこれ30分続き、終わった時にはあちこち滅茶苦茶になっていた。

後でクソババアになんて言われるか。そんな事しか俺は考えられ

な
か
っ
た。

第5話

「おい……………」

「……………」

「いつまで怒ってるつもりだ。いい加減機嫌を直せ」

「……………怒ってなどいないし機嫌も悪くない」

「顔が不機嫌だと言っているぞ」

「生まれつきだ」

そっぴやそっぴだつたと改めて気付く。

さて、今の状況を軽く整理してみようか。

今日で入学式翌日、つまり学園生活二日目の朝八時頃。場所は一年生寮の食堂。

そして俺の隣の席に座っているのは、六年ぶりに再開した幼馴染と篠ノ之箒。

後付けたしておく周囲には俺の方を見る女子の群れが。

「（いい加減珍獣扱いも止めてほしい……………」

などと俺が思ったところで状況が変わるはずもない。

だがさすがに嫌ではないか諸君。

いたるところで女子からガン見されるのだぞ。嫌だろ？俺は嫌だ。

まあ飯が上手いからそれほど気にはならない……………はずないだろ。

「まあそんなことは置いて………箒、なんで怒っているかぐらいは教えるよ。どうせ俺が昨日の夜お前の質問に対してすべてはぐらかしたことを怒ってるんだろ？」

「それは少しだ………やはり一夏のそういう所は変わらないな」

「はあ？ すまん、聞こえなかったからもう一回」

「なにも言っていない！！」

また怒鳴られてしまった、俺今のは完璧に無罪なのに。

ちなみに昨日箒との格闘を終え、部屋を片付けた後二時間ぐらい質問されまくった。

その内容は『お前はなぜそんなに変わったんだ！！』から始まり延々と。

シカトしたら竹刀で頭をシバかれまくった。さすがに死ぬかと思っただぜ。

「だから怒るなって」

「怒ってないと言っているだろう」

目の前の人物はこのように言っているが全く信じられない。女心は複雑なものだと改めて思い知らされたさ。

まあ、一つ言えるのはこいつは全く変わっていないということだ。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、兄弟揃ってIS操縦者かぁ。　やっぱり彼も強いのかな？」

「っていうか、かなりかつこよくない？　彼を見ていたらものすごくそられるわ」

こっちのほうも相変わらず。

周りの女子が一定距離を保ちながらも『興味津々、だががつつかない』みたいな良く分からない気配の包囲網。

是非とも中央から一点突破したいものだ。

後最後のは聞いていないことにした。　追及は時として死を招く。

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「……………」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三名、俺の反応を待っていた。なぜそこまで緊張するのは未だに解せない。

「一緒に朝飯食うんだろ？　別にいいぜ」

俺がそう言つや否や、三人は安堵のため息を漏らしながら座った。なぜそこでため息を漏らすんだ？

それと何故周りからはざわざわと色々な声が聞こえてくるんだ？

「お、織斑くん……………すごい、そんなに食べるの？」

「お、男の子でもこんなに食べないと思うよ……………」

「そうか？ 女でもこれぐらいは余裕だろ？」

俺は改めて自分が食べている朝食に目を向ける。

ご飯六杯に味噌汁三杯にラーメン二杯とチョコレートパフェ六杯。

ハッキリ言ってこれでもまだ抑えている。

食べすぎは不味いからな。

「逆に聞くがそれだけで足りるのか？」

三人組のトレーを見て質問する。

恐ろしいぐらいに少ない。俺だったら耐えられず暴動を起こしているぞ。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

最後の子は多分太りにくい体質なんだろう。

前者二名の飯の量の少なさの理由は全く見当がつかない。倒れないか心配だ。

「……………織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ そうか、また後でな」

筈はさつさと食事を済ませ席を立てしまった。

見ていると現代のサムライという言葉が合っそうだ。

恐らくこれは間違いではないだろう。

「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「お、同じ部屋だって聞いたけど……………」

「幼馴染だがアイツのことはよく分らん。どうやらかなりの溝があるみたいだ」

俺が何気なく放った一言。

だが周囲が大きくざわめく。一体なんなんだ？

「え、それじゃあ」

となりの女子が質問しようとした時だった。

突然手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！ 分かったらさっさと食事を済ませろ！」

その声の主は見たくもない俺の姉こと織斑千冬。

朝からアイツの声を聞いたせいでテンションが駄々下がりだ。まあアイツが俺の担任だからいずれは声を聞いていた訳だが。

ちなみに俺はさっさと食って教室に向かったとだけ記そう。

時刻と場所が変わって、今は三時間目の授業中。

一応俺もまじめを装って、勉学に励んで………いけません。
ただ単に格好だけやってやつです、ハイ。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ

「

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども………」

クラスメイトの一人がやや不安げに尋ねる。

俺は全然気にしなかったが、やっぱり気にする人は気にするんだな。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが

「

……ふと、俺と山田先生は最悪のタイミングで目が合ってしまった。そこで一回きよとした山田先生は、数秒置いてからぼっと赤くなっ

……なんだこれは？ 異様に気まずいぞ。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君はしていませんよね。 わ、わからないですよ、この例え。 あは、あははは………」

「……もうそういうことは二度と言わないでください」

山田先生のおかげで教室中がおかしな空気になった。
なんだこれは？ まるで俺が悪いみたいじゃないか。
俺か？ 俺のせいなのか、この状況を作り出したのは俺なのか？

………んな訳あるか！！

「んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

浮ついた空気を千冬がシャットアウトする。
さすがに今回の事態にはキチンとお礼を言っておいた。 心の中で
だが。

後千冬に促され、山田先生は教科書を落としそうになりながら話の
続きに戻った。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなもの
があり、お互いの対話 つ、つまり一緒に過ごした時間
で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操
縦者の特性を理解しようとしています」

ますます気持ち悪い機体だな、ISは。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

「そつ、それは、その……………どうでしょう。私にはそういった経験が今までなかったでわかりませんが……………」

結局、こんな調子で授業が進み、チャイムがなって授業終了となった。

色々な意味で疲れたのは言うまでもない。

第6話

「織斑、お前のISだが今日の放課後に来る予定だ。取りに来い」

授業が始まる前のこの発言に俺は大いに驚く。
それは周りも同じで、ざわざわと騒々しい。

「……………なんで俺に専用機なんかが？」

「学園が専用機を用意するそうだ。決闘の当日はそれで戦え」

いきなりの事に俺はこめかみ辺りを抑える。

俺はぶつちやけラファール・リヴァイブ辺りが使えればよかった。
だが政府が俺に専用機を与える。この行為は向こうの思惑が普通に表れている。

「要するに、『貴重なデータを取りたいから』俺に専用機を与える
と？　そういうことですか、織斑先生？」

「そうだが……………意外だな、お前が私の言うことを聞くとは」

「あれだけやられたらそりゃ嫌でも従いますよ」

さっきの休み時間中に千冬に呼び出された。

何かと思えば『ちゃんと敬語を使い』と言われただけ。

反発はしたよ。　そしたら出席簿アタックが六連発できやがった。
脳細胞を守るため、俺は仕方なく敬語を使う羽目になったよ。　笑
いたきゃ笑え。

……………　って、今そんなことはどうでもいい。

「その専用機は返却って出来ないんですか？」

「無理だ。政府がお前に送ってきたものだからな。それにしても折角専用機なんぞもらえるんだ、少しぐらいは喜ばんか」

「向こうの思惑がなければ少しぐらいは喜んでますよ」

俺達二人で話していると、急に周りが騒がしくなった。
あゝ、多分俺の専用機についてだな。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……………」

「ああ。いいなあ……………。私も早く専用機欲しいなあ」

次々にこういった声が出る。

まあ、それは当たり前と言えば当たり前だ。

教科書六ページに『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切表示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用し、研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』とか乗っているぐらいISは貴重な物らしい。

まあ何が言いたいかというとISは世界でも467機しかなく、コアはこれ以上は作れず、俺がいりもしない特別待遇を受けるということだ。

ちなみに突っ込みたいことは多々あるが、この際は二つだけ。

俺隠してるだけでコアとか作れるけどね。　GNドライブとか別のガンダムとかも。

「あの、先生。　篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

あ、それ等にとっては禁句中の禁句。

アイツは天才と同時に天災でもある篠ノ之束を嫌っている。

その判断は間違っていない、故にアイツに対してのその質問は禁句だ。

「そうだ。　篠ノ之はあいつの妹だ」

勝手に個人情報をばらす奴一名を発見。

そんな事を言って取り返しのつかないようなことになったらどうする気だ？

俺に被害が来るじゃないか、必然的に。

あんな人を食ったような性格の奴なんか好きになれるわけがない。

もちろん協力者であり親友でもある俺の姉のこともな。

「ええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ」

ああ、授業中だというのに。

っていうか千冬、お前は他人には甘すぎないか？

俺なら既に出席簿アタック三発ぐらいは入っていると思う。

クソッ！ これが身内効果ってやつか！！

「（っていうか箒は大丈夫か？ 『あの人は関係ない！』とか言いそうだけど）」

「あの人は関係ない！」

「（……………なんで俺の思ったことや予感当たるんでしょうねえ……………）」

突然の大声に女子一同が困惑している。

そりゃいきなり怒鳴られたらそうなるわな。 助け舟？ 誰が出すかよ。

「…………… 大声を出してすまない。 だが、私はあの人じゃない。 教えられるようなことは何もない」

箒は窓の外に顔を向ける。

女子は盛り上がった所に冷水を浴びせられた気分みたいだ。 それぞれ困惑や不快の表情をしながらも席に戻る。

「さて、授業をはじめろぞ。 山田先生、号令」

「は、はいっ！」

いや、アンタさっさと止めてたらこんなことにはならなかったよ。そんな思いを抱きながら、俺は嫌々教科書を開くのだった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対決しようとは思っていなかったでしょうけど」

どうでもいいから消え失せろ、雌豚。

休み時間に立った途端に俺の席にやって来た雌豚（確かセシリア・オルコットだったか？）が腰に手を当てながらそんなことを言いやがった。

正直な話、アンタぐらいならラファール使えば勝てるんだけどね、生憎。

「まあ？　一応勝負は見えていますけど？　さすがにフェアではありませんものね」

「意味が分からん」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたにも教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「……なんだそりゃ？　それぐらいすごいか言つのか？」

「……馬鹿にしていますの？」

「俺は自分の感想を言ったままだ。後お前は改めて馬鹿だと分かった」

「なんですって!!」

激昂する雌豚。相変わらずちょっといじればすぐに反応するな。

「……………こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「…………お前、それマジで言ってるのか？さすがにもう笑うぞ」

込み上げる笑いを懸命に抑える俺。

そんな俺の態度が気に食わないのだろう雌豚はさらに突っかかってくる。

「なにがおかしいんですの！さっきからあなたは他人を見下してばかりですね」

「お前がそれを言うか……………まあ、あれだ。専用機なんか持ってたって雑魚じゃ何の意味も無い、ただとお飾りだってことだ」

「あなた！この私を雑魚だとおっしゃるの！」

「そこまでは言っていないだろ。やってみないと分からん」

俺はめんどくさくなりそのまま教室を去る。
もちろん、昼飯を食う為だ。

アイツなんかの相手をして時間がなくなったらたまったもんじゃない。

この後昼食は普通に食った。　うざい先輩が絡んできたから追い返したと記しておこう。

そして放課後、俺は職員室に来ている。

理由はただ一つ、俺の専用機とやらを取りに行く為だ。

正直いらないけど。　いらないんだけど。

重要なことだから二回言ったぞ。　それ以外に意味はない。

「んで、コイツが俺の専用機ですか？」

「ああそうだ。　ほれ、持って行け」

そう言っって白色のISを渡される。

やっぱり、ハッキリ言っていららない。　さっきも抗議したが受け入れられなかった。

畜生！　やっぱり権力の差か！！

こんなもんをくれるぐらいならラファール・リヴァイブをくれ。それで雌豚ぐらいには勝てるから。

「ところでコイツの名前は？」

「白式だ。　さっき束から電話が来てな、そう言っっていた」

「そうですか。　ああそうだ。　それとこの機体、ちょっと弄りますんで」

そう言つて俺は職員室を後にする。

さて、色々やることもある。忙しい日が続きそうだな。

俺の言葉はまた当たり、結局この機体を改造し終わったのは決闘前日だった。

第7話

時間は進んで進んで進みまくって翌週の月曜日に。

そう、今日はセシリ……………雌豚との決闘とやらの日。

この日のために俺は自分の専用機、白式を改造しまくったぜ。

だって武装が近接特化ブレードの『雪片式型』とかいう意味の分らない刀が一本だけだぞ。しかも機体のシールドエネルギーを削って唯一仕様の特殊才能使うんだぞ。燃費が悪いし、銃とか使いたいのに使えないんだぞ。

じゃあフリーダムで戦えばいいじゃないかって？ 今はまだその時じゃない。

そのうち使う予定があるにはあるんだけど。

「ようやく来たか織斑。 後五分で試合開始だぞ」

「すいませんねえ。 機体弄り終わったのが昨日の十一時で、それからついさっきまで寝てたんですよ。 遅れてすいません」

声が聞こえて、俺は考え事を中断する。

俺がピットの近くに行くと、千冬と山田先生と篤がいた。

3人ともいつものような顔つきで俺のことを待っていたようだ。

なぜ篤がここにいるのかその意味がまったく理解できないわけだが

……………。

まあいいや、千冬がいてくれたことはかえってラッキーだ。

「フォーマットとフッティングはもう済ませてあるんだろうな？」

「とっくの昔に済ませてますよ。 それと、一応この機体に五つのリミッターを掛けさせてもらいました。 リミッター無しで使うと

危ないんで」

「……………ハアッ。　どうやったかは聞かないでおこう。　それとリミッターを外す時は自分の独断でさせてくれ……と言いたいのだろっ？　顔に出ているぞ」

「話が分かってくれて助かります。　この機体はもう俺のものだし改造も俺がしましたからね。　誰にもとやかく言われる権利なんてありませんよ」

その言葉を聞き、それぞれのリアクションを取る3人。
ハッキリ言って傍から見ていれば面白い光景なのだろう。　特に山田先生と篤が。

……………おっと、睨まれてしまった。
それにしてもなぜ毎回相手をバカにしたりとかした時に気付かれてしまうのだろう。

ちゃんとポーカーフェイスは心がけているのだが。

「それにしてもお前がまともに来るとは思わなかった。　てつきり逃げたのかと思っていたぞ。　お前らしくないな」

「いや、逃げたよ実際。　でも何かめんどくさい先輩に捕まって来なきゃいけないかった。　行かなかつたら唇を奪うとか言ってくるような奴だったぜ……………」

「……………アイツか。　ここの学園は問題児が多いな」

俺の方を向いて言うな。
確かに少しは自覚しているぞ、俺自身問題児なんだと。
でもまだましな方だぞ。　俺よりももっと問題児がいるじゃないか。

篠ノ之束とか篠ノ之束とか篠ノ之束とか。
あれ、なぜだろう。なぜアイツのことしか思い浮かばないのだろう。

………人生とは意味深なものだ。

「一夏………さっきの話、詳しく聞かせてもらおうか」

あちらさんが怒っている理由も深そうだ。

「おつといかん。馬鹿な会話はここまでにしておけ、もう時間がない。アーリーナを使用できる時間は限られている」

「へーい……さて、いよいよ初陣だな。来い、白式！」

俺は自分の手を上にかざして白式の名を呼ぶ。

この方が何かかつこよかったからこうした。他に意味なんてない。そうして0.1秒後、俺の体には白式が展開されている。

だがそこにいたのは本来の姿の白式ではなかった。

まず両腰にはフリーダムに付けていたGNソード？を二本取り付けた。

製作が追い付かなかったわけではない。ただ単に面倒だっただけだ。この試合が終わったら二本作るよ。それを装着させるよ。後無意味だと分かっているながらも右腕に作ったGNソードを付けた。なぜ劣化版をつけるのかとかいう質問はお断り。理由は想像に任せる。

まあそれは置いて、最後にお手製のGNドライブも肩に付けた。二つ作ってそれを取り付けたわけだが製作時間は三日。しかも徹

夜だ。

だがそんな感じで見事に強化することができた。元の奴よりははるかに強いだろう。

約一つぐらい別にいらぬ武装を取り付けてはいるが。

だがそんなことは今俺を見ている3人には分からないだろう。3人とも実に面白いリアクションだ。思わず写真に収めたくなくなってしまう。

「織斑……………その、ISは一体……………」

「質問は一切受け付けません。時間がないからもう行くわ」

俺はピット・ゲートに向かう。

だが不意にあることに気がつき、立ち止まる。

「箒」

「な……………なんだ？」

「勝ってくる、約束してやるよ」

「あ……………ああ。勝ってこい」

その言葉を聞き、俺は今度こそピット・ゲートに進む。さて、現実知らずのお姫様に突きつけてきてやるかな。自分よりも強い男がいるという現実を。

「あら、逃げずに来ましたのね」

俺がアリーナに入ると、雌豚がなにやら言っていた。

どうでもいいことだが毎回腰に手を当てるポーズには愛着があるのだろうか。

でも残念ながら、そんな所に俺の関心は行かない。

雌豚が乗っている機体

検索、『ブルー・ティアーズ』と一致。

外見は特殊なフィン・アーマーを四枚背に従えている。

どこか王国騎士のような気高さが出ているがあえてそこは無視しよう。

そして雌豚の手には二メートルはあるだろう巨大な銃器

検索、

六十七口径特殊レーザーライフル スターライトmk? と一致

なるものが握られている。

ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られている兵器なので、原則は浮いている。

そのおかげか自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくはない…

…はずだ。

後距離は近いため、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「最後のチャンスをおげますわ」

びつと人差し指を突き出した状態で俺に向けてくる。

なぜコイツの反応はこうも気取っているんだ。誰か教えてくれ。

「一応聞こう。　チャンスとは？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。　ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

「そんなチャンス、俺は望まないな」

「そう？　残念ですわ。　それなら

」

刹那、雌豚は俺にライフルを向ける。　ああ、もう始まるんだな。

「お別れですわね！」

キューインツ！　耳をつんざくような独特な音がした。

そしてそれと同時にライフルのレーザーが俺に襲いかかる。

普通なら、ここで避けたりするだろう。

だが俺はしない。　ならどうするのか？

簡単だ、左腕にレーザーをわざとぶつけてやればいい。

左腕を前に出しレーザーの軌道に合わせる。

そして刹那、白式の左腕にレーザーが直撃する。　俺の考えが当たるなら……………。

まず左腕に少しながら鈍い痛みが来た。　レーザーに当たったからだろう。

だが、俺の左腕の装甲はほとんど傷ついてはいなかった。　そしてシールドエネルギーもほとんど削られることなど無かった。

「な、なぜ……私の攻撃はちゃんと当たったはずですよ！」

雌豚が取り乱していた。当然だ、自分の攻撃が当たったのに俺はほぼ無傷なのだから。

だが一体なぜ俺はほとんどダメージを受けず装甲にも傷付いていないのか。

これも簡単だ、白式の全装甲はフリーダムとほとんど同じ物にしたからだ。

現時点ではガンダムの方がすべてにおいてISよりも優れている。ならばと俺は考えた。このISにガンダムの技術を搭載できないかと。

実際にやってみれば驚くほど上手くいった。

だがやはりガンダムと同じとまではいかない。性能は三つも四つも下だ。

それでも現時点でのISの中では恐らく最強の部類だろう。

俺は密かにほほ笑む。あまりに上手くいきすぎたこの結果に。

「さーて……………お前はいつまで持ちこたえることができるのかねえ」

俺の呟きは、自分でも分かるぐらいに笑いが混じったものだった。本気とまではいかないが、ちょっと付き合ってもらっぞ。

この生まれ変わった白式の性能確認にな。

第8話（前書き）

ちよつと微妙な始まり方と終わり方ですが、すいません。
次で決着にしたいと思います。

第8話

一夏side

試合が開始してすでに五分が経過している。

だが俺達の勝負が動き出してからは俺と雌豚はお互いにダメージらしいダメージは受けていないし与えてもいなかった。

向こうは攻撃しているのだが、俺が避けて攻撃が当たらない。

俺は攻撃していないため、相手のシールドエネルギーが減ることはない。

そんな状況が続いているためさすがに観客も飽きてきたようだ。

でもそんなことはお構いなし。まだ駄目だ、まだ戦う時じゃない。もう少し……もう少しで完了するんだ。

「つく……ちょこまかちょこまかと……男なら戦ってごらんさい！」

「残念だがまだ時間じゃないんでね。もう少し避けさせてもらうぜ」

だがさすがにそろそろ俺自身が逃げるのにも飽きてきた。

そろそろやつちまってもいいかな……そんなことを考えている時。遂に俺が待ち望んでいたことが起きた。

プログラムのインストールが完全に終了いたしました

出力安定、GN粒子の放出を開始します

リミッターの制御を一時的に五分の一にします

トランザムモード使用可能、ただし二分間限定、出力25%

「よっし、遂に完了したか！」

あまりの嬉しさについて大声を上げてしまう。

俺がさつきから逃げていたのにはちゃんとした理由がある。

この機体はあらかじめ装着して一次移行などは済ませておいたさ。

だがガンダムプログラムのインストールがまだ出来ていなかった。それじゃあ腕のGNソードや腰のGNソード？の本領が発揮できない。

そこでわざわざ五分もの間相手の攻撃を避け続けインストール完了を待った。

そして遂にインストールが完了し、この白式の本領が発揮できるように。

「な、なんですよ！ その機体は！」

「今頃驚くなんてな。 ちょっと遅くないか？」

俺が改造した白式の肩についているGNドライブから緑色の粒子が放出されているのを見て、雌豚は驚いているようだ。

よく辺りを見渡せば観客も驚いていることだろう。

だが今はこの機体の性能を試したい。 そのことで頭がいっぱいだ。 った。

「白式！ ちょっとの間だけ俺の野暮用に付き合ってくれよ！」

俺は右腕のGNソードを展開し、左手にはGNソード？を握る。

「ふ、ふんっ！　ようやくやる気になりましたのね！　ですがおあいにく様、もうあなたにはぶざまに散ってもらいますわ！　このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

「やれるもんならやってみる」

そこからの雌豚の攻撃は凄まじかった。

とにかく俺に向けて射撃射撃射撃と射撃の嵐を実現させている。まさしく弾雨のごとき攻撃と言えるだろう。

だが、そんな攻撃はこの白式には全く通用などしなかった。

右からレーザーが来ればGNソードでレーザーを切り裂く。

左からレーザーが来ればGNソード？のライフルモードでレーザーを相殺する。

前から来れば体を少し動かしやすやすと攻撃を避け続ける。

後ろから来ればGNドライブでGNシールドを展開し、レーザーを無効化。

まさに難攻不落。　その一言が似合う戦法だ。

雌豚も自分の攻撃が全く通用しないことに焦りを感じているようだ。

「お前、そんなに弱かったのか。　もう降参してもいいぞ」

やはり言うほどの手ごたえはなかった。　ただそれだけ。しかし、この時の俺の顔は、酷く冷めたものだっただろう。

—夏side out

セシリア side

自分の攻撃が全く通用しない。そのことに対して私は次第に焦り始めていた。

目の前の男に恐怖心すら少しずつ抱く、そんな自分が情けなかった。だがそう感じずにはいられない。なぜか体が危険信号を発信しているのだ。

そんな中、私は不意に自分の父のことを思い出していた。

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父を見て私は『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいられなかった。

そして、ISが発表されてから父の態度は益々弱いものになった。

母は、どこかそれを鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでいるくらいがあった。

「（……………なぜ、なぜこんなにも……………」

母は強い人だった。女尊男卑社会時代から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた、自分が最も尊敬する人物。

私にはとても厳しい人だった。けれど、同時に憧れた人でもあった。

それと同じぐらいだっただろうか。　自分がより男を情けないと思うようになったのは。

それから私は色々な男に会った。　でも、どれもこれも同じような男たちばかりだった。

私の家柄を気にし、顔色を伺ったりするような男ばかり。

この瞬間、私はこの世の全ての男がこんなものなのだろうと思うようになった。

上の立場の者の顔色を伺い、びくびくしながら接してくる。

母の気持ちが一気に分かった瞬間だった。

それからだ。　自分が男という生き物を見下し、興味を示さなくなっただけだ。

だがそんな私に三つの出来事があった。

一つ目は、両親の他界。　もう三年も前に事故で他界した。

いつも別々に過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、その理由は未だに分からないまま。

一度は陰謀説などもささやかれたが、事故の状況がそれを否定した。越境鉄道の横転事故。　死傷者は百人を超える大規模な事故だった。これがまず、第一の出来事。

二つ目の出来事は、それからかなり時間が過ぎた頃のこと。

両親が死んだ後に残ったもの、それは莫大な遺産。

それを狙う金の亡者が私の周りには群がった。

だが両親が残してくれた遺産を渡すわけにはいかない。　そんな思いでありとあらゆる事を勉強した。　すべては金の亡者から遺産を守るため。

そして、これが自分では運命だと感じた。

勉強の一環で受けたIS適正テストでA+が出た。

それを聞いた政府からは国籍保持のために様々な好条件が出されることに。

迷いはなく、すぐに即断した。　すべては両親の遺産を守るために。それから第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運転試験者に選ばれた。

それが次に起こった二つ目の出来事。

そして三つ目。

稼働データと戦闘経験値を得るために日本にやってきた。

それとほぼ同時に、気になる情報が私の耳に入る。

『世界で初めてISを操縦できる男が日本で発見された』。

この時私は少したが期待をした。　その男がマシであることを。だがいざ学園に来て会ってみれば、自分の期待を裏切るような男だった。

私を相手に平然と喧嘩を買ったりする。

口調は乱暴で、自分の姉ですら罵倒する。

おまけに自分の姉どころか私のことでさえ怒りのこもった瞳で射抜く。

この時はどの男よりも最低な男だと確信してしまった。　そう、この時は。

だが実際に戦い合ってみれば、向こうのすごさが身にしみて分かる。

見た事のない機体を使う男、織斑一夏。

どんな攻撃をしたところであっさりと対処されてしまう。

もちろん向こうのISに何か特別な性能があるのだろう。

そうでもしなければ、私が押されるわけがない。

でも、それを差し引いても……………あの男は強い。

今思い返せば、他の男たちとは全然違った。

家柄なんか気にせず、自分の意見を真っ向から貫く。

まさしく、私が求めていた理想の男。

「お前、そんなに弱かったのか。もう降参してもいいぞ」

不意にそんな声があの男の口から発せられる。

その男を見ると、すごく冷たい瞳をしている。まるで私と同じ瞳。

いつもなら迷わず怒りを撒き散らしていた。でも、今はそんな気分にはなれない。

あの男……………いや、あの御方に認められたい。あの御方を失望させたくない。

もうそんな気持ちしか私の中には宿っていない。

あの御方、織斑一夏に認めてもらいたい。

私の中で何かが変わった気がした。

次に自分の全てを注ぎ込む。そんな気持ちで目の前の御方に向き直るのだった。

第9話（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終わりです。

第9話

千冬side

「はああ……………。も、ものすごいですねえ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田先生が呟く。

確かにそうだ。私も平然を装っているが、内心は驚愕で染まっている。

オルコットの射撃を正確に、それも動きをなるべく最小限にして無効化している。

アイツの腕前といい機体の性能といい、どれもこれもが私の予想の斜め上。

今アイツとやり合えば恐らく負ける、それぐらいの腕前と性能なのだ。

「……………なんなんだ、あの機体は……………」

一夏の腕前はまだいい。だがどうしてもあの機体のことは解せない。

あの機体を見ていとまるで言いような不安まで抱いてしまう。

「お、織斑先生……………ど、どうしたんですか？」

「い、いや……………山田先生。山田先生はあの機体を見てどう思いますか？」

「え……………白式の事ですか？ うゝん……………そういえばあの緑色の小さな塊はなんなんでしょう？ とっても奇麗ですけど」

やはりまずはそこに行きつくわけだ。

私の予想はやはり当たっていた。まずあの機体の違和感の正体。その一つ目があの緑色の小さな物体にあった。

「私の考えでは、あれは粒子だ」

「りゅ、粒子………ですか？ でもそんな物を出す装備って有りませんでしたっけ？」

「いや、恐らくない。だがあれはほぼ粒子だと見て正解だろう」

「あ！ 織斑くんの機体を作ったのってあの篠ノ之博士でしたよね！？ だったらあれは博士が作った新装備じゃないんですか！？」

一瞬だが私の頭の中にもそんな考えが浮かんた。だがそれはあり得ない。

誰が何と言おうとも……その可能性は完全に無い。

「山田先生、残念ながらその可能性はゼロだ」

「え………そ、それはどうしてです？」

「先日束から白式に関する資料を受け取った。これを見る、どこにあんな装備がある？」

「た、確かに織斑くんが使っている装備は全くないですね」

そう、先日束から白式に関する資料を事前に受け取っていたのだ。この資料によれば白式の武器は近接ブレードが一本だけだと書かれ

ている。

アイツが私に嘘を付くとはあまり考えられない。　なら残っている可能性は

「恐らくは、一夏が自分で作ったんだ。　あの装備をすべて」

「む、無理ですよ！　IS関連企業ならまだしも普通の、それも今までISに触れたことのない人がいきなり見たこともないような物を作るなんて！」

山田先生が声を荒げる。　そうだ、普通ならあり得ないんだ。　普通なら。

……………一夏、お前は一体何がしたいんだ？

千冬side out

一夏side

明らかに目が変わった。　自分の勘がそう告げている。

先程の俺の挑発、本来の雌豚なら声を張り上げ攻撃をしてきていただろう。

もしそうしたのならもうこれ以上やり合ったところで何の意味もない。

一撃でケリをつける……………はずだった。

「（意外だな……………さっきまでの感情が全くない）」

俺自身驚いた。　今のアイツから読み取れる感情と懸命さに。

誰かに認めてもらいたい。そのために、今まで以上に全力を出す。もうアイツはそんなことしか考えてはいないと推測できる。

「（懐かしいな……………昔の俺もあんなこと思ってたっけ……………」

俺の中にある記憶。今のアイツの姿は昔の自分にそっくりだった。もう死んだ昔の自分。誰かに認めてもらいたくて必死になっていた自分。

そんな自分の姿を思い出したせいか、思わず笑みが漏れてしまいそうになる。

だがそれを堪える。そんな笑みなど出してはならない。

なによりもうそんな頃の自分は死んだ。あの頃の自分はもう死んだんだ。

「一夏さん」

「……………ああ？」

その意外な声を聞いて、過去の中に沈みかけていた意識が現実を引き戻される。

あの雌豚の声。それも、今自分の名前を呼んだ。

とりあえずは感謝しなくてはいけないのだろうが思考がついていない。

「（なぜ急に俺の名前を……………」

「まずはあなたには謝罪をしますわ。実際にやりあってみて、感じましたの。あなたの方が私なんかよりも何倍も上、それは重々理解しました。ですが……………」

「このままじゃ引き下がれないって訳か」

「その通りですわ」

アイツの言うことは少しぐらいは納得できる。

人間、無理だと分かっているのに止まらない時がある。

「（一回ぐらいは付き合ってもいいかもしれないな……）
じゃあ一体どうする気なんだ？ さすがにずっとするつもりじゃないだろう」

「もちろん。ですから……今から一度だけ、私の全力をお見せします」

「……………いいだろう、見せてくれ。お前の本気ってやつを」

俺達は再び距離を取り合う。 お互いの距離はおよそ15メートル程。

俺は右腕のGNソードを再び展開し、左手のGNソード？は腰に戻す。

それが試合再開の合図となった。 向こうは先程みたいに射撃をしてくる。

だが、明らかに先ほどなどとは比べ物にならないほど正確性のあるものだ。

先程から俺を狙って攻撃を行うブルー・ティアーズのビット。

先程の射撃はただ単に撃ちまくる素人同然のものだった。

だが今は俺の反応が一番遠い角度を狙ってきている。

正直、さっきみたいな攻撃なんかより何倍も対処が難しい。

ISの全方位視界接続は完璧だ。　だがそれを使っているのはあくまでも人間。

自分の真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に見ることが出来ない。

送られてくる情報を頼りに頭の中で整理するからどうしても誤差が生じる。

向こうはそれを上手くついできている。　代表候補生だけはある。

「確かに先程とは比べ物にならないぐらいに正確だ。　けどな……それぐらいじゃ俺は止まらないぞ！」

俺はビットの軌道を読みビットの後部推進器を切り裂いて落とす。その他のビットも同じような感じで次々落とす。

そして等々残りのビット数は一。　完全に積みだ。

だが向こうは焦っているものの、目の光は衰えていない。

何か秘策でもあるのだろうか。　少し引かかる。

「だが関係ない！」

アイツの真正面に俺は特攻する。

最後に残ったビットが俺に向かって攻撃を仕掛ける。

だが俺はビットから放たれたレーザーごとビットを切り裂く。

そのままアイツとの距離を一気に縮めた。

すでに距離は俺の有利な物に。　ライフルでの砲撃も間に合わない。

だがそこでアイツは……細く微笑んだ。

「　　かかりましたね、一夏さん！」

ウンッ。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「すみませんが、ブルー・ティアーズは六機ありますのよ！」

回避は

間に合うわけがないか。

しかも、さっきまでのレーザーでの攻撃とは異なる攻撃。あれは『弾道型』、すなわちミサイルだ。

「（この展開、俺のミスもあるが……やれば出来るじゃねえか）」

ドカアアアンッ！！

その直後、俺は爆発と光に飲み込まれた。

一夏side out

セシリアside

当たった。今、確実に自分の攻撃が当たった。

ハッキリ言って今でも信じられない。自分の苦肉の策が通用するとは。

まさか自分の攻撃が当たるとは思わなかったからだ。

たった一撃、本当に、たったの一撃。ただそれが当たっただけ。それでも、とても嬉しかった。格上の相手に、初めて通用した。その時、なつかしい感覚が体の中を駆け巡った。

その当時、まだ私がISに乗って少ししか経っていない時だった。いつも私の訓練の相手をしてくれていた優しい女性。

その人に初めて攻撃を当てることができた時の感覚に今の感じは似ている。

その人は試合が終わった後、優しくこう言ってくれた。

「やったじゃないセシリアちゃん。よくがんばったわね」

その言葉が何よりも嬉しく、私はISの訓練に没頭した。

今思い返せば、そんな簡単な感情さえも見失いかけていた自分。恥ずかしい、今さらそう思う。でも……それでも……

「どうだ？ 何か大切なことを思い出せたのか？」

声のする方に向く。彼はそこにいた。

爆発の煙が晴れ、ISに身を纏った男性、織斑一夏。

そのISの装甲にはほとんど傷が付いていない。もう手はない。

私の負け。

悔しさはある。でもそれ以上に……嬉しさがある。

様々な思いのこもった嬉しさ。それを知れたことこそが何よりの収穫だった。

「お陰様で大切なことを思い出しましたわ。 ありがとうございませす」

「そうか………どうするんだ、試合の方は。 まだ続けるんなら付き合っが」

「ふふふ………私がなんて言うか分かっているくせに」

私はおかしくなって笑みを漏らす。

そして、清々しい気持ちでその言葉を言い放った。

「セシリア・オルコット……降参しますわ」

『試合終了。』

勝者

織斑一夏

その直後、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

とても悔しい、でもとても嬉しい。後……とても清々しい。

そんな複雑な感情を思う自分がおかしくなって思わず吹き出してしまった。

一夏さんも……ほんの少しだけ、頬を緩ませ笑みを浮かべていた。今日、私は人にとって大切な物が何なのかを再び思い出すことができた。

そして……再び自分が憧れる人を、見つけたすことができた。

第9話（後書き）

ちよつと変な感じで終わってしまいました。

すいません。

第10話（前書き）

今回もまた微妙でしたね。

毎度毎度すみません。

第10話

一夏side

「よくもまあ、あんな出鱈目な機体に改造したものだ。それが一体どういう意味を表しているか分かっているのか、この大馬鹿者」

釈然としない。その代わり、不満ばかりが一方的に溜まっていく。試合が終わって俺が千冬達の所に戻ると、いきなり千冬に罵倒された。

しかも馬鹿者から大馬鹿者にランクアップしてしまった。嬉しくない。

「なんで勝ったのに罵倒されなきゃいけないんだよ」

「その理由、お前なら分かっているだろう。……あの粒子の出る装置といい白式に搭載した武器といい、すべてが今お前しか持っていないものだ」

「粒子の事とかよくそこまで気付いたな」

さすがに洞察力は並はずれて突出しているようだ。

でもさすがにトランザムの事とかガンダムの事とかはばれていない……と思う。

だって使っていないし話してもないからな。

「そんな事はいい。だがあのIS、お前はどのような気だ？」

「どうする気……とは一体どのような意味なのか問わせてもらいま

すよ」

「さっきも言ったが、お前ならとうに気付いているだろう。さっきの試合、お前は少なくとも二発の攻撃を受けた。だがお前の機体の装甲などほとんど傷ついてはいない、おまけにシールドエネルギーなんかはほとんど減っていない。そんな機体を各国の連中が見ればどうなるのか今のお前が考えたら一発で分かるだろう」

「ああ………そういう事ね」

俺の白式はいまや世界最高の性能を持ったISになった。

それを各国のお偉いさん方が見たら、絶対にデータ取ったり情報提供を促してくる。

それを心配しているのか、千冬は。まあ対策なんていくらでもあるけどな。

「対策はある。リミッター掛けまくって第二世代型ぐらいまで性能を落として戦うとか、いつそ俺が取り付けた武装やらなんやらをすべて外すとか」

「ならリミッターを掛ける。こちらが許可するするまでは絶対に外すなよ」

「……まあ考えときます」

とりあえず一旦この話は終了のようだ。

「ところで織斑……オルコットと戦った感想は？」

「そうですね……やっぱりまだ雑な部分がありますね。まあ、そ

んな心配はいらないでしょう。大切な物を見つけた奴ほど強いものはありませんし」

「お前はどうかんだ？」

「…………俺もアンタも、そしてアイツも一緒さ。大切な物を見失っている弱い奴らだ。俺の場合は自らそれを捨てただけだな」

俺がなんと返答するか大体予想していたのだろう。向こうは何も言わない。

それだけ確認して、さっさと俺はその場を去った。ほぼ空気になっていた山田先生と箒を残して。

「……………」

「（め、めっちゃ居心地がワリーーーー！なぜこうなったんだー！）」

俺は今寮の自室に帰っている所。…………いや、詳しくは俺たちと言った方がいいか。

さっき箒を置いて来たせいなのだろうか。俺の方を睨みつけてくる。

幸い、機体の事とかは全然聞かれなかったが、一つだけ嫌な質問をされた。

そしてそれをはぐらかしたことも関係しているらしい。ますます

不機嫌だ。

「な、なんでさっきから睨みつけてくるんだよ」

「心当たりが無いはずがないだろう」

はい、ごもつともですね。

だが……それでも言わん。機体の事とかは特にだ。

「……一体なぜだ」

「……急になぜだと言われてもどう答えればいいんですかねえ」

お願い、ずっとこつち見て睨むのは止めてくれよ。

ほれ見る。すれ違う生徒が俺に同情的な視線を向けてくるじゃないか。

お前だって嫌だろ同情されるのは。俺はなおさら嫌だ。

「なぜお前はそこまで強い。お前は本当にISに二回しか乗ったことがないのか？」

「何バカなこと言ってるんだよ。お前も知ってるだろ、俺がISに乗れると分かったのはつい最近だってことを」

「ならばなぜお前はあんなにもISを改造できる。改造しているお前を見ていたが……ものすごく手つきが良かった。まるで今までに何度もしているかのようにだったぞ。腕前も、技術も、知識に関して……まるで姉さん以上に感じる」

ぐ……さ、さすがは天才兼天災の妹だ。いくらなんでも鋭すぎ

るだろ、箒よ。

……いや、よく考えたら俺のミスか。　やっぱり俺ってアホなんだろうか。

「その所、どうなんだ？」

「……………無理だ、教えられない。　いくらお前でもだ」

「それは絶対か？　他の誰にも教えることはできないのか？」

「絶対だ。　お前だって知っているだろう、お前の姉がどんな事をしでかしたか」

その言葉を聞いて箒は俯き、黙ってしまう。　表情もとても暗い。

そうだ、アイツはそんな奴だ。　自分の妹にさえこんな顔をさせる。　アイツは何も見えちゃいない。　自分の足元にさえ注意がいつていないような奴だ。

いつかは潰さないといけない相手。　そうでもしないと、ますます世界はおかしくなる。

俺や箒みたいに人生を潰される奴らが増えてしまつかもしれない。　だから潰さねばならない。　たとえ世界を敵に回すようなことになってもだ。

「……………俺はな……………お前の姉さん。　つまり篠ノ之束をいずれ潰すつもりだ」

「な！？」

「驚くのも無理ないだろう。　けどな、アイツはやってはいけないことをやってしまったんだ。　ISなんて馬鹿みたいな物を生み

出してしまった」

「む、無理だ！ 姉さんに勝てるはずがない！ いや、それ以前に世界が黙ってはいないぞ！ 最悪殺されるかもしれない」

「それじゃあ黙って指をくわえてるしかないってのか？ そんなのは嫌だ。 それじゃあ、俺やお前みたいな人生を潰された奴らが浮かばれない」

「っ！ ……だ、だが……………」

やはり戸惑っている。 当然か、いきなり幼馴染に姉を潰すなんて言われたら。

筈はやはり心の片隅では姉を慕っているのだろう。 それなら納得が出来る。

だがこれだけは言うておかなければならない。 一人の幼馴染として。

その幼馴染の姉と自分の姉を潰す決意をした一人の人間として。

「これはもう決めたことだ。 ……俺、織斑一夏はいずれお前の姉の篠ノ之束と俺の姉の織斑千冬を潰させてもらう。 抵抗はしてもらって結構だ。 俺の前に立ちふさがり、俺を潰そうとしてくれても構わない。 だがな……………もしそうするなら覚えておいてくれ」

「俺の前に立ちふさがる障害物はすべて叩き潰す。 それがもしお前となるならば、俺は絶対に容赦はしない。 潰されたくないなら手は出さないでくれ。 手を出さない限り、俺は誰であろうが絶対に危害を加えるような真似はしない。 だがそれが分かってもお立ちふさがるなら……………俺はお前を、最悪の場合はこの世から抹殺する」

「っ！ い、一夏……そ、それは……冗談……だろ……」

「この目が冗談に見えるか？ 見えないだろ、少なくともお前には」
申し訳ないと思う、箒には何の罪もない。 だが立ちふさがるなら仕方ない。

いちいちそんな感情を引っ張っていては、逆にこちらがやられてしまふ。

だから言わなければならなかった。 俺の決意を。

「……なら……一つだけ聞かせてくれ。 お前は……お前は、なぜそこまで歪んだ？」

「歪んだ……か。 違うぞ箒、俺は歪んだんじゃない。 死んだんだ」

「し、死んだ？」

「そうだ。 昔の……無邪気に笑っていた頃の織斑一夏は死んだ。
今の織斑一夏は、ISや天才とその親友を憎む、おろかな存在だ」

俺は再び歩みを進める。 気分転換に屋上へ向かうために。
だが、もう箒については来なかった。 それでいい、それじゃないと駄目。

俺が進む道に巻き込んではいけない。 おれが行く道は……俺一人で充分だ。

「いつまでコソコソ隠れているつもりですか、織斑先生」

屋上に着いて、一服すること十分程。俺は自分の姉の名を呼ぶ。先程の会話を聞いていたのは知っていた。言う手間が省けるからわざと気付かないふりをしていたことは向こうもお見通しだろうな。全く、恐れいる。

「……先程の会話、あれは紛れもないお前の気持ちか？」

「当たり前だろうが。……俺や箒、他にも全国の奴ら。いや、それだけじゃねえ。世界中の奴らがお前ら二人のせいでどれだけ人生を狂わされたと思ってんだよ」

向こうは答えない。いずれはこの時が来ると分かっていたのだろう。

ただそれが自分の弟になっただけ。ただそれだけのことだ。

「まあアンタは多少は変わったんじゃないか。相変わらず天災の方は好き勝手にやってくれてるみたいだがな」

だけどな、と付け加える。肉親が何だ、そんなものはもはや関係ない。

簡単だ。世界のバランスを崩した代償が跳ね返ってくるというだけ。いまさら迷いなんてない。もうそんな事を考えてやるぐらい俺はできてはいない。

「あんた等二人には償ってもらうぜ。世界にお前らはいらない火種をまいたんだ。火種なら俺がすべて消し飛ばしてやるよ。だ

から……お前らは償え。 一生だ」

俺達二人の間に強い風が通り過ぎる。

恐らくそれを実行するのはまだ先の話になるだろう。

だがこの日、確実に俺の周りが少し変わった。それが何を意味するのか。

俺はほんの少しだが、気付いていた。

第11話（前書き）

オリキャラを出したいと思います。

まあ敵っぽいキャラなんですけどね。

第11話

一夏side

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がり
でいい感じですね!」

今はセシリアとの決闘の翌日。もつと細かく言えば朝のホームル
ームの時間。

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子也大いに
盛り上がっている。

だが対照的に俺は暗い顔をしている。当たり前だ、あり得ないこ
とが起こっているのに笑える奴なんていると思うなよ。……い
や、多少はいるのかもしれない……。まず目の前の問題をどうに
かって、そんなことはどうでもいい。かしなければ。

「山田先生、納得できないことがあるので質問です」

「はい、なんですか織斑くん」

「俺は昨日の試合には勝ちました。確かにそれだけだったら俺が
クラスの代表なんですけど、俺昨日セシリアに代表の座を譲ったは
ずなんです。だからクラス代表は俺ではなくセシリアですよ」

これは実話。昨日、セシリアの部屋に行って代表の座を譲ってき
たのだ。

努力と経験を積んでいけばセシリアにはまだまだ伸びる可能性があ
るから。

面倒くさかったからじゃないぞ。一応念のために言っておく。
後セシリアと呼ぶことにした。本人がそうしてほしいと頼んできたから。

……でも結局セシリアの返事は聞けてなかったような気がする。
まさかとは思うが……自ら辞退なんてしてないよな……。

「それは」

「すみません一夏さん。そのお話は受け入れられませんでしたの」

声のした方を見る。そこには何故かしよげているセシリアがいた。
意味が分からない。なぜそんなにしよげて謝っているのが尚更
分からない。

俺が譲ると言った時にはあれだけ嬉しそうにしていたのに。解せないぞ。

「オルコットには悪いが、その話は無しにしてもらった」

「アンタが主犯か！」

バシンッ！ 久々の出席簿アタックが俺の脳を揺らす。相変わら
ずの破壊力だ。

「まるで私が悪いような言い方だな。言っておくがこれは誰にも
非はないぞ」

「いやいやいやいや！ 今聞いている限りでは貴方に非があると思っ
ますよ！」

「……そう言えば説明していなかったか。仕方がない、一から説

明しよう」

めんどくさそうな態度をとるの、マジでやめて下さいませんかねえ。こっちはちよつとイライラしてるんですよ。

なにが悲しくてクラス代表をやらなければならぬんだ。俺よりもセシリアの方がよっぽど適任だっての。

「本来ならば今織斑が言ったようにオルコットが代表をやるはずだった」

「はずだったって事は、何か理由があるんでしょうねえ」

「織斑、イライラしているからと言って当たるなよ。だがその案は却下された」

「誰に？」

「お前の言う世界各国のお偉いさん方だ」

ああ、大体話が見えたわ。つまりはこういうことだ。

世界各国は俺のデータが欲しがっている余りセシリアを代表にする話は却下された。

もしセシリアが代表になったら俺のデータを取る機会が減ってしまう。

だから世界各国が圧力をかけて無理やりにも領かせたわけだ。

IS学園もさすがに世界各国から言われまくったら領くしかないわな。

この腰ぬけが！ と罵ってやりたい自分が心の片隅にいる。

「つまり俺のデータが欲しいがために俺がクラス代表をしなくちゃ

いけないんすか？」

「話が早くて助かる。言っておくが世界各国のお偉いさん方を消すとかいう考えは捨てる。後始末が大変だ」

「……………クソ、なんで俺が考えてた事を先読みするんだよ……………」

俺は机に頭垂れる。

周りからは同情の視線やらなんやらが俺に向かっていていることが分かる。

正直、今の俺にはとても有り難かった。マジで、有り難かった。

「そ、それでですわね」

急にセシリアが俺の方を見て何かを言おうとしている。

それが何なのかは俺には分からない。だって俺エスパー持ってないし。

「是非とも一夏さんに訓練を付き合ってもらいたいと思いますの。
一夏さんの実力は恐らくこの学園でも指折りの物。ですから是非ともお願いいたしますわ」

あ、その手もあったか。あ……………でもなあ……………。

俺機体の改造またしなきゃいけないからあんまり時間がないんだよなあ。

だが、そんな俺の思考は一気に中断されることになる。

バン！ 机を叩く音が響く。立ちあがったのはなんと箒だった。

その表情は……………何も言えない。何か言ったら殺されそうな雰囲気が出ている。

「一夏！　そういう事なら私も一緒に鍛えろ！」

わーい、面倒事が一気に三つに増えたぞー、ワイワイ……ってアホか！

俺にもやることがあるからそんなに時間がとれないんだよ！

っていうかなんで誰も俺の味方になってくれないの！？

おいそこ！　目があったのにそっぽ向くな！　後もう同情は要らん！

「あら、篠ノ之さん。　残念ながら一夏さんは私の訓練に付き合っ
て下さるの。　悪いとは思いますが他の人を当たってもらってもよ
ろしいでしょうか？」

「ならお前が別の奴とやればいい！　私は一夏と訓練する！」

お互いににらみ合っている。　傍から見れば、滅茶苦茶怖い。　後
仲悪すぎ。

まるで昔の俺と千冬みたいだ。　最近はお互いにやわらかくなった
んだぜ？

昔はお互いに刃物を持って一晩中格闘をしていたこともあったな。
って、それよりも聞き捨てならないセリフがいくつかあったんだが！
なんで俺がお互いとするみたいになってんの！　なんであと決定的
な空気が流れてるの？

「座れ、馬鹿ども」

勢いよく出席簿がセシリアと箒の頭に振り下ろされた。

聞こえてはいけない音が聞こえてきたのは恐らく気のせいではない
だろう。

「クラス代表は織斑一夏に決定だ。　後のごたごたは後日解決しろ」

投げやりかよ！ 思わず叫んだが出席簿が降ってきたのであえなく黙る。

結局授業が終わった後に三人で色々話し合った結果、時間が空いている時に俺が二人の特訓に付き合うという形で丸く収まった。今日以上に女の恐ろしさを知った日はないと記しておこう。

「単刀直入に言う。 お前は一体誰だ？」

俺は謎の侵入者に向かって言い放つ。 …… 展開が急すぎて分からない？

じゃあ順を追って説明をしていこうか。 今現在の時刻は夜中の十二時半。

俺は白式の更なる改造を終え、眠りに着こうとしていた。 そう、していた。

だが急に謎の反応があり、この屋上にやってきた。そこにいたのは一人の女。 普通なら生徒だと思っだろう。

だが違った。 そいつは腕のいたるところに包帯を巻きまくっていた。

それだけじゃない。 そいつの目は……怪しい、薄い赤い光を放っていた。

あまりに奇妙な姿に一瞬嫌悪感を感じたが、すぐに平然を装う。

誰にも気づかれずにこの学園に侵入した。これから二つの可能性が導かれる。

一つは狙いが恐らく俺だということ。

そしてもう一つは……向こうが独自に専用機を持っているということ。

「もう一度聞くぞ。お前は一体誰だ、さつさと答えな」

「ふふふ。そんなに怒らなくなたっていいじゃない。織斑一夏くん」

相手の第一声はそれだった。美しい声、だが同時に怪しい声でもある。

コイツは警戒しなければならぬ。思わずそんな感覚に襲われた。

「俺に用でもあるのか？ もしあるなら手短に頼みたいね」

「ふふふ、なら手短にしちやおうかしら」

そう言つて女は一つ間を開ける。そして……驚きの言葉を放った。

「ねえ一夏くん。私と組んで、この世界を壊さない？」

一瞬、何が起きたか分からなかった。だがすぐに現実に呼び戻される。

警戒を強めるが、向こうは嘘をついているようには見えない。

つまりはこういうことだ。

俺の目的と近い物をあの女は持っている。これでもう十分だった。

「お前は……俺と組んで世界を壊したいんだな。理由は？」

「この世界は腐っている、以前一夏くんが私に言ってくれたじゃない」

「なに……悪いが俺はお前を知らない。嘘を付くのはよしてもらおうか」

「……………ガンダム」

「っ！」

「一夏くん、私に教えてくれたじゃない。もう忘れられちゃうなんて悲しいなあ」

向こうは対して悲しそうなそぶりは見せない。だが俺はそんなことに気はいかない。

いくのはただ一点。この女がガンダムの存在を知っているということ。

そして……記憶を巡ると、そいつの正体が分かった。俺がガンダムの存在を教えた唯一の人間、そいつは……………

「お前は……………」

「あ！ ごめん一夏くん、もう時間がないや。返事、期待してるよ」

次の瞬間、女の全身はガンダムの装甲に包まれていた。全身装甲。その姿は、紛れもない、俺が作ったガンダムだ。かつて俺はフリーダム以外に一つのガンダムを作った。それを一人の少女に渡した。

その少女の事はよく覚えている。俺と同じ人生を狂わされた少女だったから。

「その機体はエールストライクガンダム……………やっぱりお前は……………」

その呟きを聞いたら満足したのか、ストライクは俺から離れて行った。
だが俺はその後ろ姿をずっと見送る。そして、完全に分かってしまった。

「あの機体は俺が作ったもの。それを使っている女。……………間違いない」

アイツは……………俺の初恋の人であり、実際に恋人だった女性。
事実を知った俺は……………真夜中の、その場に立ち尽くすことしか出来なかった。

第12話

一夏side

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

もう四月の下旬となり、桜の花びらも全部なくなった頃合いだ。

そして今は千冬の授業の最中。本来なら、気は全く抜けないはずだった。

だが今の俺はどこか集中しきれない。それもこれも昨日の夜の出来事が原因なんだ。

「（アイツ、一体何やってんだ？ もしストライクなんかに乗って政府の奴らなんか目をつけられでもすれば………やっぱりもう一度会って話し合うほか無いのか………）」

「おい織斑、聞いているのか？」

「（だがアイツに操縦の仕方とかいろいろ教えちゃったからなあ。下手をすれば国家代表に勝つこともあるかもしれないから………はあ、骨が折れそうだな。白式も第二世代ぐらいになるようにリミッターを掛けたから………）」

バシンッ！ 俺の頭に出席簿という名の凶器が振り下ろされる。毎度毎度思うがなぜ出席簿の威力がここまであるのだろうか。

「さっさと機体を展開させて飛べ。今日はやたらと集中力を欠いているようだが私の授業の時に集中力は欠くな。もちろん他の授

業の時もだ」

だったらややこしい言い方をするなと心の中で思う。

だが反論すればいいことは起こらないので、素直に意識を集中する。そう言えばなぜ白式の待機状態の時はガントレットなんだろうか。

フリーダムを含めたすべてのISは待機状態はアクセサリーなのに対して白式は右腕に着けるガントレット。ガントレットは防具だと突っ込みを入れない。

「集中しろと言っている」

やばいな。次ちんたらしたら絶対に出席簿が落ちてくる。

そして俺が完全に集中してから一秒後、白式が俺の全身を包む。

そして白式の機体を見て、誰もかれもが驚きの様子だった。

そりゃそうか。この機体は……………

「……………全身装甲。織斑、また機体を改造したんだな」

「俺自身がやってるんだからそれぐらいは認めてもらえるでしょう、織斑先生」

セシリアとの試合が終わってからの七時間、ずっとこの機体の改造に時間を当てた。

おかげで完全に睡眠不足だが、そんな瑣末な問題は置いてこう。

まあ結果的にGNソードは取り外してバラバラにした。

実際に使ってみて、少し癖があったり使いにくかったりしたことが原因。

その代わりと言っては何だがGNサーベル二本とGNライフル一丁を追加。

一応雪片も置いてはあるが余程のことが無い限り使う機会はないだ

ろっ。

……あ、今思ったが機体名変えた方がいいよな。
もうISじゃなくてほぼガンダムみたいな機体になってしまったし。

「まあいいだろう。二人とも、飛べ」

言われてからのセシリアの行動は早かった。急上昇し、遙か頭上で静止する。

よくそこまでやる気が出るな。そういう所は見習いたいと思う時があるさ。

そう思いながら俺もセシリアと同じぐらいの所まで上昇する。
あくまでゆっくりとだが。

「何をやっている。いくら性能を落としたとはいえ遅すぎだ」

無茶を言うなよ。

第二世代みたいな低い性能だともやりずらいんだ。

「一夏さん、具合でも悪いのですか？ 今日ばばうっとしていらしたみたいですし」

「いや、特に問題ない。機体を改造したから扱いに慣れていないだけだ」

適当に返事を促しておく。

とにかく眠い。さっさと自室に帰って布団に埋もれたい。

いや眠いのは俺のせいなんだけど……まあいいじゃん。俺は寝たい。

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。

何事かと思ひ声のした方を見ると、遠くの地上で山田先生がインカ
ムを箒に奪われておたおたと慌てまくっていた。
なにをそこまで怒っているのだろうか？

昔から女という生き物のことはよく分らない。

もしテストとかで問題を出されたら正解確率は25%ぐらいだろう
な。

「しかし、このハイパーセンサーとやらはよく見えすぎるな。悪
用するような輩が出ないか多少は心配だ」

「ですがこれでも機能制限がかかっていますわよ。元々ISは宇
宙空間での稼働を想定して作られたもの。何万キロと離れた星の
光で自分の位置を把握するためですから、この程度は当たり前によ
うに見えますわね」

さすがは優等生にして代表候補生。
こういった説明はお得意のようだ。

この説明の力を少しでも箒に分けてやれないかと考えてしまう。
アイツの説明力の無さはあきれを通り越して感心するぐらいにひど
い。

アイツには学校の教師とかは絶対にむいていない。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は
地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

すぐさまセシリアは地上へと向かう。

代表候補生だこのことはある、と少し感心してしまう。
口先だけの奴らとは大違いだ。

「……………てか、俺もすんの？」

考えてみたが、当たり前だ。

そしてどうやらセシリアが完全停止も難なくクリアしたらしい。

……………面倒だけど、行くか。

その後俺も難なくクリアした。

そして授業の方も一回も止まらずに終わりを迎える。

これで本当に終わりだったらどれほどよかったことが。

後から思い返し、俺は心からそう思ったのだった。

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱんぱん。クラッカーが乱射される。

ちなみに今は夕食後の自由時間の真っ最中。

場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっているが、俺は沈黙。

だって今回の事態はハッキリ言って強制みたいなものだぞ？

ただでさえ嫌だったのに強制でやらされてみる。やる気なんか出ないだろ？

「いや〜、本当におめでたいね織斑くん！」

「……………」

めでたくないよ。ちつともめでたくなかないよ。
大体なんで俺がクラス代表になつたぐらいでパーティーなんか始めてるんだ。

なんだよ『織斑一夏クラス代表就任パーティー』って。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

おい、さっきから相づちを打ってばかりのその女子。
お前確か二組の奴だっただろ。

大体おかしいだろ。俺のクラスは三十人ぐらいしかない。
でもここにいる人数完全に五十人は超えてるじゃんねえか。
もう関係ない奴らはさっさと布団に入って寝ろ！

「人気者だな、一夏」

「……………本当にそう思っているのならお前の勘違いだぞ」

「ふん」

なんでまたこんなにも機嫌が悪いんでしょうか。

誰でもいいので女性についても多々正しい接し方をお教えてください。
もう俺には無理です、アイツの機嫌なんて直せません。

「はいはい、新聞部です。今ものすごい話題になっている新人生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜!」

おい、そこ一同盛り上がるな。 オーじゃねえよ、オーじゃ。

「あ、私は二年の黛薫子。 よろしくね。 はいこれ名刺」

「……………わざわざご丁寧にありがとうございます」

「ではではぜひ織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ!」

ボイスレコーダーを俺の前にずっと向けてくる。

無邪気な子供のように瞳を輝かせているのは錯覚などではなく現実だろう。

…………… 無難なセリフを言っとくか。

「本当はセシリアに譲るつもりだったんだが…………… まあなった以上はなるべくがんばります。 俺負けるのは大嫌いですから」

乗り気ではないが、いつもみたいな感じの声で話す。

しょうがないだろ、これぐらいしか思いつかなかったんだから。

「おー、なかなかいいコメントだね〜。 でももう少し何か欲しいな〜」

「…………… 俺の敵はすべて殺す」

「おおう！ いいねいいね！ そういうコメントを待っていた!」

「……………そうですかい……………」

なんだこの扱いにくい新手の先輩は。
まるでここのおバカな生徒会長みたいな扱いにくさだぞこりゃ。

「でも放送コードに引っかかりそうだから、適当にねつ造しておこう」

ねつ造すんなよおい。 何のために俺はあんなセリフを吐いたんだ。
それにおかしいだろ。 何だよ放送コードに引っかかりそうだから
つて。

後そのテープを放送しようとするな。 したら殴り飛ばしてやる。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、
仕方ないですね」

などと途端にセシリアのインタビューが始まる。

結局この後も俺の疲れる展開がてんこ盛りだった。

写真騒動に筈からの視線攻撃や千冬からの出席簿アタック。

今日という日を一言で言い表すならば……滅茶苦茶疲れた。

それぐらいに俺は疲れた。 大事なことから二度言ったぞ。

だが、俺はまだ知らない。

『アイツ』が この学園に来ていることなど知る由もない。

第13話

一夏side

「織斑くん、おはよー。　ねえ、転校生の噂ってもう聞いた？」

朝。　今日もまたIS学園での学生生活が始まる。

朝朝食を食べ、すぐさま自分の教室にある自分の席へ。

だが俺は席に着くなりクラスメイトにいきなり話しかけられた。

転校生？　こんな時期にIS学園に転校生が来たのか？

「転校生……聞いてはいないな……でもこんな時期に本当に来るのか？」

そもそも今は四月。　普通は転校ではなく入学だろう。

しかもこのIS学園に転校するにはいくつか条件があったはずだが。

それも普通の奴からすればかなり難しい条件だったと思う。

試験はもちろん、国の推薦とかがなければ絶対に無理。

……待てよ。　それじゃあもしかして転校生ってのは……

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「やつぱり代表候補生なのか……だが何故今のような時期になって来たんだ？」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組にいるイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。
彼女が自信満々にそう言うが、その可能性は多分低いぞ。

代表候補生になった奴は大抵が天狗みたいな感じになっているからな。

二日ぐらい前のお前みたいな状態の奴だろうと思うぞ、俺の推測では。

全くもって愚かなことだ。　せめて国家代表になってから威張ればいい物を。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？　騒ぐほどのことでもあるまい」

いつの間にか俺のそばに来ていた幼馴染の篤がそう呟く。

こう言っているがやはり篤も女子。　噂には敏感だし多少の興味もあるのだろう。

……なぜまた俺が睨まれているのかは全然分らないけど……。

「っていうか、どんなやつなんだよ……」

代表候補生ともなれば戦う時の面倒くさは一般の奴の何倍にもなる。

なのでやはりそいつに関するデータはある程度持っておきたい。相手が使う武器やそのISに関するデータ、操縦者の得意不得意など。

そうすれば、こちらは苦労せずに有利な試合運びが出来る可能性がぐんと上がる。

例えば俺が改造する前の白式がいい例になる。

あれは中距離戦や遠距離戦には全く向かないが、近距離戦なら操縦者の腕次第で鬼のような強さを発揮することができる。

だが逆に言ってみれば白式は近距離戦しかできないただの欠陥機。だからこそ、セシリアのように遠距離からの攻撃が有利になる。

遠くからビームや実弾兵器を効率よく使い分け、シールドエネルギーを減らす。

相手が攻撃してくればすぐさま対応して、距離をとりながら攻撃。これで一方的なワンサイドゲームを展開することができる訳だ。

まあ近距離勝負しかできない欠陥機なんて白式ぐらいなものだと思うが。

結局何が言いたいかというのだ。自分にとって有利な情報は必ず武器となる。

これはもう決まり事。すなわち確定事項ってやつだな、うん。

「む……………一夏、お前は気になるのか？」

「どっちかと言えばISのデータとかの方が気になるけどな」

「ふん……………」

素直に答えたただけなのに、筈の機嫌はより一層悪くなってしまった。最近はやたらと気分が悪くなったり良くなったりしているようだし……………俺は別に悪くないぞ。 本当だからな。

「全く……………今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？ もう来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「いや……………俺は女子じゃなくてその女子のISのデータとかが気になるんだが」

必要はないと思うがここでクラス対抗戦について軽く説明しておく。クラス対抗戦とは文字通りクラスの代表同士によるリーグマッチ。本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るために行く。

また、クラス単位での交流およびクラスの団結のためのイベントだそうだ。

やる気を出させるために、一位クラスには優勝賞品として学食デザート
の半年フリーパスが配られるとか何とか。

餌付けは万全、女子が燃えるように上手く仕込んだみたいだ。

「……まあ負ける気はこれっぽっちもない。どんな奴でも俺は必ず勝つけどな」

「大丈夫ですわ一夏さん！ 一夏さんの実力なら余裕ですわよ！」

「まあ余程油断しない限り、お前の負けはほぼありえないだろうな」

「そうだよ織斑くん！ 絶対に一位を取ってね！」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメイトの順番で好き勝手言ってくれる。

そりゃ負けはしないが、ここまで期待されるほどの行事でもないと思う。

大体デザートばかり食べてたら気分が悪くなったりはしないのか。俺はショートケーキ三つ食ったら絶対にトイレでリバースしてしまう。

なーんて馬鹿な事を考えていたら、俺の周りはいつの間にか女子で埋め尽くされた。

だがいつものパターンなのでさほど驚きはしなくなっ
てはきたが、いかんせん女子ばかりなので甘ったるい臭いがしてならない。胸
やけを起こしそうだ。

しかも女子は本当に噂が好きなようだな。 ついていけないぜ。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

女子一同の実に楽しそうなこと。

さすがに雰囲気をぶち壊すわけにはいかないので相づちを打っておく。

しかし、こうやって誰一人として嫌われることのない学生生活。嫌だったがいざやってみれば意外といいものだ。

……こんな光景をもっと昔に味わいたかったものだ。

「その情報、古いよ」

だがそんな思考も中断せざる終えなくなった。

とても懐かしい声が、今俺の脳内に響いたからだ。

だがアイツは今中国に行つてこの学園にはいない……ってまさか……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そいつは腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている。

そいつの姿を見てやはりと確信した。

そつだ。転校生は中国にいるはずの俺の幼馴染だったんだ。

「……お前……鳳鈴音か？」

「そつよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たっ

てわけ」

「……いつ見ても変わらないな。お前の性格といい仕草といい」

その言葉を聞き、鈴が小さく笑みを漏らす。

その拍子にトレードマークともいえるであろうツインテールが軽く揺れた。

「だが再びあえて言おう。全然似合っていないから今すぐ止めた方がいいぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

ようやく普通に喋ったか。　そういえば……と少し昔を思い出す。

鈴は何故かいつも俺の前では気取ったような喋り方をする奴だった。そのたびに俺が突っ込み、今みたいな状態になる。

鈴もどこかおかしい奴だった……記憶があるが定かではない。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！　聞き返した鈴の頭に出席簿アタックが決まる。

おお、ダースベーターのBGMが脳内に自然と流れたぞ。

さあ、鬼教官こと織斑千冬の登場だ。

「もうSHRの時間だ。　教室に戻れ」

「ち、千冬さん………」

「織斑先生と呼べ。 さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。 邪魔だ」

「す、すみません……………」

鈴は千冬に言われた通り、すごすごとドアからどく。

昔から鈴は千冬に対してビビりまくっている。 ものすごく苦手らしい。

まああんな危険すぎる生命体と付き合えるのは天災ぐらいだろう。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

どこに俺が逃げる様子が含まれていたんだ？

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

鈴は二組に向かって猛ダッシュをしていた。

アイツは一体何の用があつて一組の教室に来たんだ…………。

ああそうか、宣戦布告をするためか。 さつき本人が言つてたしな。

「アイツもIS操縦者か。 出来れば乗ってほしくないんだがなあ」

だが、これが俺の失態だと気付かなかつた俺は後で自分の愚かさを呪つた。

「…………一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子はどういう関係で

」

そのほか、クラスメイトからの質問集中砲火。 ああ、やっちゃった……。

バシンバシンバシンバシン！ 千冬の出席簿が火を噴いた。

「席に着け、馬鹿ども」

その一言ですべてを締めくくれるコイツは一体何者なのだろう。そんな感じで今日という一日が始まるのだった。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、いきなりセシリアと篤が文句を言ってきた。おかしい、俺は何もしていない。 今度のはマジだ。

「なぜ俺が…… 大体、二人とも集中力を欠きすぎだ」

このふたりは午前中だけで山田先生に五回注意を受け、千冬に三回叩かれている。

学習しようぜ、学習を。

大体何故俺が千冬の言うことを大人しく聞いているのか分かるか。今はまだアイツにはあまり逆らえないし、逆らったら面倒だからだ。とりあえず教訓。 千冬の前では決して油断をするな。 もはやこ

れは格言だ。

「とりあえず俺は学食に行く。話ならそこで少しは聞くぞ」

「む……まあお前が言うなら仕方がない。同行しよう」

「そ、そうですわね。私も一緒にさせていただきますわ」

という訳で学食へ移動。クラスメイトも何人かついてきた。だがそこで思わぬ人物と再会することになる。

今日の朝一組に押しかけてきた転校生、凰鈴音がそこにいた。

「待ってたわよ、一夏！」

「待つのはいいがどいてくれ。食券出せないし通行の邪魔になっている」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

鈴のお盆にはラーメンが鎮座している。

どうでもいいことだが、とつくに伸び切っていないかそれ。

「鈴、ラーメンの麺が完全に伸び切っているぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体アンタを待ってたから伸びちゃったのよ！ なんでもっと早く来なかったのよ！」

「それ言うなら千冬にでも言ってくれよ」

いつものことだが鈴はうるさいな。

元気なのはいいが少しは周りの目とかを気にしてくれないか。
お前は女だからいいが俺は男。 注目の的になって仕方がないんだよ。

「だが久しぶりだな。 もう一年ぐらいにはなるか。 元気そうだな」

「元気にしてたわよ。 アンタもアンタで病気には掛かってなさそうだしね」

「そりゃどうも」

久しぶりの会話。

中学の頃はコイツに助けられる部分もあったからな。

そう言う面では多分世の中で一番信頼できる人物だ、鈴は。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！ 一夏さん？ 注文の品、出来てましてよ？」

箒とセシリアに会話を中断される。

そして何故かかなり不機嫌そうだ。

もう誰でもいい。 だから俺を助けてくれ。

「む、向こうのテーブルが空いてるな。 行こうぜ」

咄嗟に鈴を含めた全員に促す。

なんとかテーブルにつけたはいいが、なにせ十人近くいる。
気まずいことこの上ない。

女子は何故か俺が食べてる途中にこっち見てくる時が多々あるし。

「そういや鈴、いつ日本に帰ってきた？ おばさんは今でも元気でいるのか？ 一体いつぐらいに代表候補生になったんだ？」

「アンタ質問ばかりね。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニユースで見たときはびっくりしたわよ。まさかあの一夏がＩＳに乗ったなんて」

丸一年ぶりの再会ということもあって、俺は普段では考えられないぐらい鈴に対して質問を投げかけてしまう。

さすがに幼馴染としては空白期間は気になって仕方がない。

それが鈴だからということもあるのだろうか。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

疎外感を感じていたのだろう。 箒とセシリアが急に聞いてくる。 後クラスメイト達も興味津々といった感じでこちらを見てくる。

「？別に今は付き合っ
てなんかいないわよ、あ
たし達」

「鈴は俺の幼馴染だ。まあ昔は一時付き合っていたけど」

[illegible]

大音量が辺りにこだまする。

鈴の方を見ると、かなり怒っていた。

……はいはい、すいませんでした。　周りに配慮出来ない馬鹿な男で。

「だから昔の話だ！。　別れた以降は親友みたいな関係」

「幼馴染……？」

箒が怪訝そうな声で聞き返してくる。

珍しい。　箒なら真っ先に怒鳴って掴みかかって来そうなものだが、あ、セシリアに関しては何故かほっとしたような感じだ。　なぜだろう？

「そうだ。　箒が箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？　鈴が転校してきたのは小五の頭ぐらい。　で、中二の終わりに国に帰ったから会うのは一年ぶりってわけだ」

「ふうん、そうなんだ」

鈴はじろじろと箒とセシリアを見る。　そして何故か笑いながら俺の方を見てきた。

「一夏、アンタも大変ね」

「お前何言いたい？　後なぜ顔が半笑いになっている？」

「さあ。　自分で考えれば」

全く解せない。　なにがそこまで面白いんだ。

「初めまして。　これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

「よろしく願いますわ」

挨拶を交わす三人。

だが鈴が箒とセシリアに小声で何かを呟いた途端に二人は真っ赤になる。

……何故だ。何かよく分からないが嫌な感じがする。

鈴がああいう風に笑ったら、絶対に何かが起こる。

これは昔の経験から言える事だ。鈴め、何を企んでいる？

だが俺の考えは外れたのか、その後は何もなく終わる。

だが一つだけ言えることがある。鈴は間違いなく何かを考えている。

中学時代もそんな感じだったしな。

一夏 side out

第13話（後書き）

鈴は一夏を恋愛対象とは見ていない設定に。
そして次回は一気にクラス対抗戦まで時間が飛びます。

第14話

一夏side

残念な事に今日はクラス対抗戦の試合当日。

ちなみに場所は第二アリーナでいきなり第一試合。組み合わせは

まさかの俺と鈴。

誰か仕組んだのではないのか？……と少し疑ってしまうのは余談。

だがそんなことより嬉しいのは、幼馴染の鈴との再会から特に大きな問題もなくこの日を迎えることができたことだ。

アイツが余計な事をするかしないか身構えていたが何もなかった。

これでもう鈴は何も企んではない……はずだが分からない。

人の裏をかくのが得意だからな、鈴は（かく言う俺も得意だが）。

「……てか、観客が異様に多い……そんなに注目する相手同士じゃないだろう」

そして二つ目の残念な事。観客の数が異様に多い事だ。

どうやら噂の新生生同士の戦いとあって、アリーナは全員満席らしい。

それどころか通路で立ってまで見る生徒がいるため通路は埋め尽くされている。

会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞すること。

「やっぱりGNドライブとか外しといて良かったな……」

GNドライブの事が世間一般に知られることはまだいい。

知ったところでその役割を理解できるものなどないだろう。

だがもしその役割を見抜かれたら馬鹿な研究者たちが製造方法を求めてくるはずだ。

壊されない限りほぼ永久的にエネルギーを生み出すことができる、その関係でシールドエネルギーは減ってもすぐに回復することもあるGNドライブ（普段はリミッターを掛けているため、シールドエネルギーは普通に減る）。

研究者たちやお偉いさん方が飛びつきたくなるのも分かる。

その危険性をなくすためにわざわざGNドライブを白式から外したこれで恐らくGNドライブの存在が漏れる心配はないが、代わりに別の問題が浮上。

なんと白式のスペックが驚くぐらいカスになった、とにかくカスになった。

GNドライブを取り外したことによる性能の低下やそれに伴いGNソード？やGNサーベル、GNライフルの威力も著しく低下。それに加えリミッターを掛けることを余儀なくされたために世代は第二世代型まで落とすことに。これで機動力やブースター出力などもかなり低下。

こんな機体をカスと言わずに何をカスと言うのか、俺には見当がつかない。

仕方なく雪片式型、そしてGNサーベル二本にGNライフルを搭載。装甲に関しては恐らく大丈夫なはず……あくまではずだからよく分からん。

まあ操縦でそういった部分を補うしか手はない。残念ながら。

「（後は鈴の出方次第だな）」

俺の視線の先には、鈴と鈴が扱うIS『甲龍』が試合開始を待っている。

色々バタバタしていたため、甲龍に関するデータは全く集められなかった。

……やばい、この試合最悪の場合負けるかもしれないぞ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向かい合う。

鈴は俺の機体を興味深そうに見ていた。

ああそうか。普通ISに全身装甲の物なんて無かったな。そんな事を考えていると鈴から開放回線が入ってきた。

「一夏、あんたの機体すごいわね。初めて見たわ」

「最初は誰でも思う。俺以外はな」

「でも一夏って初心者よね。少しぐらいならレベルを下げるわよ」

「どうせお前のことだから雀の涙ぐらいしかないだろ」

大体手を抜かれてやられたらあまり面白くない。

……いや、俺が機体のレベルを落としてるのは千冬の指示だからだよ。

決して手加減するとかそういうものではない。ここ重要。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴が言ったことは脅しでも何でもない、ただの真実だ。

俺が作った武器の中にもいくつか、IS操縦者に直接ダメージを与えるための装備が存在するがあまりにも危険すぎるため使っていない。

その武器は競技規定違反、何より人命に危険が及ぶ。

だが、『殺さない程度ならいたぶっても大丈夫』という現実はある。鈴も一応は代表候補生なのでそういうことは可能なだろう。

俺から言わせてもらえばISなんか殺し合いに使う兵器だ。

それなのに協議規定違反とは何とも面白おかしいルールだと思う。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響く。それとほぼ同時にお互いが仕掛ける。

鈴が異形の武器で斬りかかるが、間一髪のところの後方に飛び退く。そして二連発でGNライフルを放つがすべて防がれてしまった。

「ふうん。初撃をかわして攻撃を加えてくるなんてやるじゃないけど」

鈴が手にしている異形の武器をバトンを扱うかのように回す。

良く見ればあの武器、刃が持ち手についているため縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えながら斬り込むことが可能のようだ。

「（機体の動きが悪い！……一旦下がるしかないか）」

機体になれる意味も含め、すぐさま後ろに移動する。

だがその時鈴の口元が薄く笑ったのを俺は見逃さなかった。

「甘いわ一夏！ これを待ってたのよ！」

「なんだと！？」

刹那、鈴の肩アーマーがスライドして開く。

俺はすぐにその武器が何なのかを悟ったが、少し遅かった。

中心の球体が球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされる。

なんとか耐えるが、鈴の攻勢がやむはずはなかった。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる鈴。

ドンッ！ またもや見えない衝撃に吹き飛ばされる。

そして俺は地表に叩きつけられ、シールドエネルギーを削られてしまう。

「（やれやれ……衝撃砲か。ただでさえ相性が悪いのに……こりゃキツイ）」

状況は最悪、このままだと勝率もあまりない。

いきなり迎える予想外のピンチに、俺はただ打開策を巡らせる。

見つけれなければその先にあるのは敗北。それしかないのだから。

一夏 side out

千冬 side

動きが悪い。まずはその感想しか出てこない。

一夏の状態は恐らく悪くない。問題は、一夏が使っている白式にある。

「なんだあれは………？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた篠ノ之が呟く。
それに答えたのは、同じくモニターを見つめるオルコットだった。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して放つ。あれはブルーティアイズと同じ第三世代型兵器ですね」

それを聞いた篠ノ之はモニターに映っている一夏を見る。
その瞳は、無事を祈る思いが込められていた。

「……………一夏さん、様子がおかしいですね」

「「えっ？」」

山田先生と篠ノ之の声が重なる。

さすがは代表候補だけある。一夏の異変にもう気付いたか。

「一夏さんの動きは代表候補生……………いえ、国家代表にも通用するもの。ですが今日の動きは素人に毛が生えたようなものですわ。……特に手を抜いている訳では無さそうですのになぜ？ 一夏さん、体調が優れないんでしょうか」

「オルコット、それは違うぞ」

「お、織斑先生は原因を知っているんですの!？」

「そう迫るな、暑苦しい。織斑が苦戦している訳はあの機体にある」

「びゃ、百式が原因なんですか？」

篠ノ之が分からないといった感じで尋ねてきた。

オルコットもそれは考えなかったのか、篠ノ之と同じ状態になっている。

山田先生は……放っておこう。 フォローする気にもなれん。

「先日のオルコットとの試合の後織斑に機体の性能を落とすように指示した」

「一夏さんがあのまま戦っては圧勝で戦う相手は成長しないからですか？」

「その通り。そしてアイツは第二世代型まで性能を落とすと言っていた。アイツが嘘を付くとはあまり思えん。やることはちゃんとやる奴だからな。まあそれはいい、だが予想もしなかった問題が今起こっている」

そう言つて私は三人にあるデータを見せる。

篠ノ之は訳が分からなさそうに見ていたが、他の二名は違った。その表情からは驚きの色が色濃く表れている。

「このデータから分かるのは……一夏さんの動きに百式がついていない。ですが、そんな事本当にあり得るんですの？」

「分からん。だがそれ以外に考えられない。まあ織斑の事だ、打開策の一つや二つは思いつくだろう。悪知恵は働く奴だからな」

さも適当なように言っておく。

……一夏、お前はどこまで私の常識を覆すんだ。

そんな思いが駆け巡っていたため、私は気付かなかった。
私以外の三名がジト目で私を注視していたことに。

千冬side out

一夏side

「よくかわすじゃない。 衝撃砲 龍咆 は砲身も砲弾も目に見えないのに」

鈴の言う通り、衝撃砲は砲身も砲弾も全く見えない。

しかもこの衝撃砲は砲身斜角がほぼ制限なしで撃てるようだ。

真上真下はもちろん、真後ろまで展開して撃ってくる。

鈴が基礎を高いレベルで習得している事もあり避けるのはかなり骨が折れる。

だがある程度の予測は立てられるため、俺はなんとか衝撃砲をかわしていた。

機体の方にもちよつとだけ慣れたので動きも傍から見れば良くなつたはず。

本調子には全然届いていないが。

「（悪いが仕掛けさせてもらうぜ、鈴）」

もうこの一手にかけるしかない。

決まれば恐らく俺の勝ち、決まらなければ俺の負け。

俺は次の行動へ全神経を集中させる。

「一夏！ いくらなんでも集中力を切らしすぎよ！」

そう言つて鈴は衝撃砲を放とうとする。

今しかない。俺はGNライフルで肩アーマーを狙撃する。
発射前で予想外の攻撃を受けた鈴は一瞬だが行動が止まる。

「待つてたぜ！ お前が行動を停止するこの瞬間をな！」

刹那、俺は一気に加速する。

これは『瞬時加速』と言い俺が得意とする技能の一つ。
瞬間的にもものすごい速さで相手に近づくことが可能だが、軌道が読まれやすく急激なGが体にかかるため意識が飛ぶ可能性がある。
だがそれはISの操縦者保護機能が働き、意識が飛ぶことはなかった。

鈴もしまったといった風に顔を歪ませるがもう遅い。

俺は0.1秒で雪片式型を展開し鈴に向けて振りかぶる。

そして『零落白夜』を発動し、体重を乗せて雪片を振り下ろす。

もう完全に決まった、俺の勝ちだと確信した。

その時だった。

ズドオオオオンッ！！！！

アリーナ全体に巨大な衝撃が響き渡った。

第14話（後書き）

微妙なところですが、ここで一旦切らせてもらいました。

第15話

一夏side

アリーナ全体に突然大きな衝撃が走る。威力も範囲もかなりのもので桁違い。

ステージ中央からはもくもくと大量の煙が上がっていた。どうやら原因になったものはアリーナをぶっ壊した際にできた衝撃波らしい。

全くつくづく思う。今日の俺は全く運が回ってこないと。

「もしかしてまた戦わなくちゃいけないパターンか？」

思わず呆れる俺に鈴からプライベートチャンネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

なに言ってたんだよあの貧乳のチャイナ娘は。そんな失礼なことを思った瞬間、緊急通告が送られる。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

「あくまで狙いは俺だけってことかよ……めんどくさいなあ」

いつもの俺なら瞬殺できるが、いかんせん今は二つの不幸が重なっている。

一つ目は向こうの所属不明のISの事。

あのISはアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた。

だがアリーナの遮断シールドはISと同じもので作られているため貫通など出来ない（俺のフリーダムやGNドライブを付けた白式なら余裕）。

それを貫通したということはそれほどの攻撃力を兼ね備えているということ。

最悪の展開になった場合は、串刺しにされて人生のゲームセット。すぐに天国か地獄に行けるってわけだ。

そして二つ目の不幸。これは本来ならあり得なかったことだ。悲しいかな白式は俺が色々取り外したりしたためかなり弱くなってしまうている。

そしてさっき鈴と試合をした時、ISが俺の言うこと全然聞いてくれなかったためにいらないダメージを喰らいまくった。

そして止めに零落白夜を使ったためシールドエネルギーが激減。ハッキリ言って後二、三発喰らったらISが強制解除される。

鈴もかなり消耗しているため、これ以上の戦いは厳しいものがあるだろう。

もちろん一人もしくは二人で戦うことはできるだろうが勝率はあまり高くはない。

死亡率や負傷率は限りなく高いんですがね。

まあ一言でいってしまえば絶対絶命、ピンチというヤツだ。

『一夏、早く！』

「俺は別に引くのは構わない。だが鈴、お前はどのような気だ？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

無茶言うな。お前みたいな弱っちい奴置いて行ったらやられるの

がオチだ。

「だったら俺が侵入者の相手をするからお前はさっさと逃げろ。その方が勝率は高いし俺の日頃のストレスも解消できる」

「アンタの方が弱いくせになに言ってるのよ！ しかも明らか私情だし！」

う、うるせえよ。俺だってストレスぐらい普通に溜まるわ。

大体こんな女だらけの所に来て羨ましい訳ないのに、なぜか男どもは俺を羨ましいとか目の敵みたいな目で見てくるんだよ。

おかしいだろ。なんで俺は悪いことの一つもしていない……前言撤回。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾」

「どうでもいいがよそ見をするな」

よそ見をしていた鈴に熱戦が襲う。

急いで駆け寄りGNサーベルを二本共使ってなんとか軌道を逸らす。だがGNサーベル一本が使い物にならなくなった。

「ビーム兵器。しかもISにしては中々の出力だな」

ハイパーセンサーからの情報で相手の熱量を知った俺は少し驚く。良し決めた。あのISのコアは無傷で俺が持ち帰る。

「な、なに前に出てきてんのよ！ アンタはもう戦えないでしょ！」

「あれは俺の獲物だ。　アイツの残骸はすべて俺がもらっ」

「何バ力なことを　」

「……どうやら向こうはやる気満々みたいだな」

鈴が怒鳴っている最中も俺だけに向かってビームの連射が放たれる。すべて避けたがどうも気に食わない。　まるで俺に恨みがあるみたいだ。

そして俺が避けたと分かれると攻撃をしてきたISが浮かび上がった。きた。

「……なんて気持ち悪い見た目なんだ……」

姿からして明らかに異形、後気持ち悪い。

深い灰色をしたそのISは手が異常に長い上に首がない。

しかも腹立たしいことに形は全然違うがガンダムと同じ『全身装甲』だった。

通常の場合、ISは部分的にしか装甲を形成したりはしない。

理由は必要性がないから。

防御などはほとんどがシールドエネルギーによって行われている。なので見た目の装甲というのはあまり意味を成さない。

もちろん防御特化型ISで物理シールドを搭載しているものもあるのだが、それにしても肌が一ミリも露出していないISは俺の白式以外に聞いたことがない。

更にその巨体も、普通のISではないことを物語っている。

腕を入れると二メートルを超える巨体は、姿勢を維持するための全身にスラスタロがついているのが見てとることができる。

頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先ほどのビーム砲口が左右に合計四つもあった。　ハッキリ言ってキモい

以外の言葉が出ない。

「その気持ち悪いお前、一体何者だ？」

「……………」

乱入者はこちらの呼び掛けにこたえようとはしない。

当たり前と言われれば当たり前なのだがどうもカチンときてしまう。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！
すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生が割り込む。 心なしか、その声からはいつもより威厳がある。

だがその必要はない。 あれは俺の獲物だ、俺が潰す。

「その必要はないですよ山田先生。 それと織斑先生に代わ
つてもらえますか？」

「え？ あ、はい！ 今代わりますね！」

「助かります」

「一体どうした織斑？」

すぐに千冬が出てくれた。 だが今は一分一秒でもおしい。
早くあのISを潰したい。 今すぐにでも。

「リミッターの解除をしたいんですが、許可をお願いします」

「……だがそれは「俺の動きに機体が付いてこれてないことぐらいお見通しですよ」……いいだろう、許可しよう。他に用件は？」

「鈴に撤退指示を出して下さい。いくら注意してても巻き込む可能性がある。巻き込んで殺してしまうなんてことになったら嫌ですからね」

「いいだろう。いいか、絶対に倒せよ」

「了解」

そしてすぐに千冬は鈴に撤退の指示を出す。

初めは何やら言っていたが苦手な千冬が言うのもあってかしげしげ引き揚げて行った。

そのためここに残っているのは俺と無人のISのみ。観客なども全員避難しているため、思いつきりやれる。

「白式。あの気持ち悪いISをぶっ潰すために、俺に力を貸せよ」

そして……白式に掛けていた四個のリミッターの内二個だけ外した。するとどうだろうか。全身に再び力が舞い戻ってくるのが分かる。そしてようやくリミッターを解除した影響が現れた。

シールドエネルギーは全回復した上に更にエネルギー量が上がる。俺の動きにちゃんとついてきてくれる。いい感じだ。

本来の力とまではいかないがそれでもあのISを壊すには十分だろう。

「装備は……あの刀一本とGNライフルが一丁にGNサーベルが一本……！ ははは、ようやく俺にも運が向いてきたようだな」

さて……敵さんも退屈しているみたいだからな。そろそろいくか。俺は雪片を右手に、GNライフルを左に持ち敵ISに突っ込む。ガキンッ！

互いの武器がぶつかり合い、火花が散る。

だが俺の方が優勢だ。つばぜり合いも俺の方が徐々に押している。

「喰らいな！」

左手のGNライフルで右足を狙い撃つ。

敵ISは命中した拍子に少しだけバランスを崩した。

そんな隙を見逃すはずもなく、俺は左足で思いきり腹を蹴り飛ばす。思いのほか遠くまで吹っ飛んでいった。

「どうした？俺を狙うにしちゃあ実力が無さ過ぎねえか？」

だが敵ISは無言で起き上がる。

そして先程俺に放った熱線を再び放つ。

俺は素早く雪片をしまい代わりにGNサーベルを持つ。

そしてGNサーベルで熱戦を切り裂く。上手くいくかどうか分からないが成功。

どうやらリミッターを外したことによる機体の性能の向上がここにも出たらしい。

「いいねいいね最高だ！抵抗してくれなきゃ面白くない！」

再び俺は敵ISに突っ込む。

恐らくだがその時の俺の顔には笑みが浮かんでいたことだろう。

第16話

千冬side

「どうしてあんな危険な申し出を飲んじやったんですか、織斑先生！」

山田先生がものすごい勢いで私に詰め寄る。

恐らく一夏がああISを倒すことを不可能とも思っているのだろう。

後接近しすぎで熱い。 さっさと離れてほしいところだ。

「織斑がやると言っているのだ。 別にやらせても問題あるまい」

「お、お、織斑先生！ 何を呑気なことを言っているんですか！！」

ええい暑苦しい！ そんなに寄るな、余計に暑苦しい！

「そこまで言うならモニターでも見てみる」

「モニターを……………す、すごいですねえ織斑くん……………」

山田先生が見ているモニターに私も顔を向ける。

そこに映し出されていたのは侵入してきたISを圧倒する一夏の姿。本来なら喜ぶべきなのだろうが、素直に喜べない何かがある。 そんな感じがした。

だがそこはあえて無視した。 いや、せざる終えない感覚に襲われたからだ。

その理由を知ってしまえば一気に自分という存在が崩れかねない。

そんな強烈な感覚に襲われたからだ。 情けないと言えは情けない。

「これで分かっただろう。 織斑なら必ずあのISを倒す。 私達は余計な心配などせず構えていればいいんですよ、山田先生」

「……でも……」

「コーヒーでも飲め。 そうすれば自然と気持ちちが落ち着くはずだ」

「……あの、先生。 それ塩ですけど……」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止める。

そして塩だと思われる白い粒子を容器に戻した。

……いかん、これでは一夏のことを心配していると思われるしまう。 いや、実際に多少は心配だが知らればどんな事になるか。

絶対に知られることだけは阻止しなければ。 出来なければ明日はない！

「なぜこんなところに塩などあるんだ？」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……………」

ま、まずい。 これで言い逃れはできなくなってしまった。

もし山田先生が余計なことを言ってきたら暴力で無力化するしか。

こうでもしないと私の感情は晴れはしない。

「い、いただきます……………」

「……そうだ山田先生。それは熱いからな、一気に飲むといい」

悪魔だと思いたいなら思うがいい。

だがその時には鉄拳制裁を喰らわせてやる。

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「行つてどうする？ 織斑の足手まといになるだけだぞ？」

「そ、それは……………」

少しうるさかったオルコットを黙らせる。

まあ、一夏ならなんとかするだろう。 何せ私の弟だからな。

千冬 side out

今なにか頭の中にいらつとする単語が聞こえた気がする。

誰かが俺の蔭口でも叩いているのか？

もしそれが俺の嫌いな奴だったら殴ろう。 うん、殴ろう。

……と言つても目の前の気持ち悪い物体をどうにかする方が先な
んだけどな。

「しかし攻撃したことによって余計に気持ち悪くなるとは……複雑な気分だ」

俺が気持ち悪いと称する襲撃者は目の前に倒れていた。

いや、倒れざる終えないといった方が正しいかもしれない。

右腕は俺がGNサーベルで切断し、左脚はGNライフルで粉碎。

左腕も若干被害は受けているが、使えるには使えるようだ。

右脚は無傷。 だって狙ってなかったからな。

「いい加減に動かなくなってくれないか？ この白式、どうやらリミッター外しても結構弱いことが分かったから。 お前切り裂くの
に力使うんだよ」

「……………」

だが敵ISはまだ抵抗する気らしい。

左手を俺にかざして熱線を放とうとするがそれより先に俺が仕掛ける。

GNライフルで手を破壊し、GNサーベルで肘から下を切り落とす。
雪片？ あんななまくら使えるか。

「ちょ、ちょっと一夏！ ツツコミ遅れたけど何で腕斬り落として

んのよ！」

「今更な上にいたのか鈴？ お前アリーナから脱出したんじゃ」

「遮断シールドがレベル4に設定されてからし、扉もすべてロックされてたから無理だったのよ。 後いくら相手が侵入者だからって腕なんて切り落として責任とれるのアンタ！」

「よく見る。 この機体、無人機だ」

「……え？ む、無人機？」

「無人機」

鈴が放心状態？……になる。

どこに不思議要素がある。 俺だってザク三体ぐらいなら無人でも操作できるわ。

「む、無人機なんてありえないわ。 ISは人が乗らないと絶対に動かない。 そういう仕組みで出来てるものだもの」

そんな当たり前なことは教科書にも載ってる。

ISは人が乗らないと絶対に動かない。

だが本当に動かないかと言えばそれは分からなくなってくる。 ISの技術は今から何年も昔に発表された。 その時はまだそこまですべて技術が進んではいなかったためにISは人が乗って動かさなければ動かなかった。

だが今はどうだ？ あれから十年以上たってもあの天災が生み出す技術が停滞しているなんて考える方がよほど難しい。 それにアイツは今逃亡中の身。

無人機を操るシステムを開発しても外部には絶対に漏れない。
その気になれば全世界にその情報を漏らすこともできるが。

「そんな常識は既に覆されているだろ。　ISを作ったのはあの天才兼天災と呼ばれている篠ノ之束だぞ。　最先端の技術を開発しても独り占めに出来る」

「じゃあ今右脚しか残っていないそのISを送り込んできたのは篠ノ之博士なの？」

「可能性は低くない……というか高すぎる」

「じゃあさっさと潰せばいいじゃないそれ。　気持ち悪いし」

「ISのコアを傷つけたら元も子もないだろ？　あのコアは俺のものにする」

「千冬さんに殴られて没収されるのがオチよ？」

「守り切ってみせる。　そのためなら俺は……まあ対して頑張らないけど」

鈴との話を終えた直後の事だった。

ドゴオオンッ！！

それは実に………実に嫌な音だった。　何かが壊れるぐらいの音だった。

二人してゆっくりと………ゆっくりと前を向く。

だがそこには絶対に起こってほしくなかった状況が起こっていた。

無人機が粉々に潰れていた。　上から何かで潰されたのだ。

慌てて二人して上空を見るが、なにも見つけれなかった。

いや、鈴だけは見つけれなかったと言っておこう。

俺は確かに見た。雲の間から少しだけ緑色の物体があったのを。

「（エールストライクからランチャーストライクに換装しての砲撃……あいつめ、さては俺が無人機を無力化するのをずっと狙ってやがったな。畜生、コアは……もう無理だな。原型がない）」

「一夏、ドンマイ」

「うるせえよ畜生。ああ、千冬に殴られそうだ」

こうしてすっきりしないまま全てが終わった（？）。
今は一刻も早く帰って寝たい。そんな気分だった。

第16話（後書き）

こんなつまらない終わり方ですいません。

二巻からはもうちょっとまともにできるようにがんばります。

第17話

一夏side

「いつてえ……コアが壊れたぐらいで出席簿を三発も頭に叩き込みやがって」

「アンタが悪いんじゃない。 自業自得よ、馬鹿一夏」

試合終了後、すぐに俺と鈴は千冬の元に呼び出された。

すぐにISのコアが修復できないほどまで破壊された 別に直そうと思えばできるのだがわざわざ面倒事を増やしたくなかったので嘘をついた 事を告げる。

それを聞いた鬼はしばらく考え込みそして一言。

『織斑、百キロの重りをつけグラウンド百周がいいか私に三発シバかれた後に反省文を百枚書くのとどちらがいい？ 好きな方を選ばせてやるっ』

聞いた瞬間に闘争ならぬ逃走を図ろうとしたが読まれて捕まった。そして結局強制的に後者の方を選択する羽目に。

いくら俺がへまをしたと言ってもあまりに重すぎとは思わないか？俺は思う。 どのくらい思うかというと地球が滅びるくらいに思う。後この世からゴキブリがいなくなるくらいに……この例えはナンセンスだ。

だがむしろゴキブリなんて今すぐ地球上からいなくなればいいと思う。

だって料理とかしてたらカサカサいいながら出てくるんだぜ？わざわざサーベルで蒸発させなきゃいけないんだぜ？

面倒だろ。君たちがサーベル使ってゴキブリ駆除するかどうかは知らないけど。

「一夏、アンタまた下らない事を考えてたわね？」

「別に。ただゴキブリがこの世から消えてしまえばいいと思っていただけだ」

「同感だけどやっぱり下らないわね。アンタの反省文の手伝いしないわよ？」

「げげ……頼むから手伝ってくれよ。百枚とか書けるわけないって」

「じゃあ下らないことを考えるのはやめなさい」

「分かりました分かりました。考えなきゃいいんだろ」

こういった事を言っでは来るが結局は手伝ってくれるわけだ。

昔からの親友。俺の数少ない本音を話せる奴。

心の底から信頼してもいいと思える人物だ、鈴は。

鈴には話してやりたいことも多々ある。いや、多すぎるぐらいだ。でもまだ話す時ではない。話したい事を話すのはまだまだ時間がかかる。

だから『今は』親友というポジションでいてもらいたい。そう、今はだ。

「所でさあ、一夏」

「……人が考え事してる時になんだ、急に？」

「今は蓮ちゃんとはもう連絡したりはしてないわけ？」

「っ！……………ああ、もう会ってない。久し振りに思い出したな」

そんなわけない。今日だって、直接ではないが見ている。

この前の夜だって暗くてよく見えなかったが、アイツだって分かった。

だがあの感じといたるところに巻いていた包帯は理解できなかった。もつともMSを持っていると分かった時に一瞬で思い当たったが。

……アイツの名前は常葉蓮。俺が初めて会った時にそう言われた。鈴の次の俺の恋人。始めて会ったのも中学に入学してから。

その当時、俺はまだ鈴と付き合っていたこともありまじいかなと思うことも。

それでも鈴とはとても仲が良く、中学の時には俺と鈴と蓮、それと弾の四人でいつもどこかへ遊びに行ったり食に行ったりしていた。今思えば鈴は蓮のために俺と別れたんだっけ。

更に思い出せば色々と思い浮かんでくる。俺達四人の思い出が。

「確かあたしが中国に帰る一か月前に外国に行っちゃったんだっけ

……………」

「あの時は慰めるのに大変だったな。かなり不安定になってたし」

そう、連もまた鈴と同じく外国に行った。

ただ鈴は故郷に帰ったのに対し蓮の家族は仕事の都合でドイツへ。それっきり連絡を取り合っていない。

最近会ったからとりあえず大丈夫だとは思うが、何か引っかかる。

だが上手く違和感の原因が出てこない。 故に気持ち悪い、気分的に。

「……まあアンタに会えたんだからそのうち会えるわよね」

「なんだそのいかにも適当な結論は？」

「て、適当なんかじゃないわよ！ あたしはちゃんと考えた結果として……」

「はいはい、じゃあそういうことでいいんじゃないの」

「ほんと可愛げがなくなったわね一夏」

「元から可愛げなんてものは持ち合わせてねえよ」

ついにはたわいもない会話に戻るが、俺は感じ取ることができた。

鈴は俺に何か告げようとしたが、それを中断したんだ。それも蓮関係。

一瞬聞くか聞かないか迷ったが結局聞かないことに。 どうせまたその内会うことになるんだろう。 その時に聞こう。

「あ……………」

「何だよ鈴……………あ……………」

「……………あ、とは何だ。 あ、とは……………」

俺たち二人は一応俺の部屋の前に来ることができた、一応。

だがそこではファースト幼馴染こと箒が腕組みをしながら居た。俺達に変な声を出したせいかな不機嫌になってしまっている。

まさか疲れているのに最後の最後まで俺に疲労を蓄積する気が、箒よ。

後神よ、アンタ絶対に俺のこと大嫌いだろ。

「ふ〜ん……一夏、あたしが先に反省文書いててあげるから行って来なさい」

「行くってどこに行くんだよ？ 部屋はもう目の前だぜ」

「アンタって途端に鈍くなるから。ホント見てて飽きない生き物ねえ」

うるさい、人を珍生物みたいな言い方するな。

大体それを言うならこの学園にいる女子だってそうだろうが。なに男の俺を見ただけで大きな歓喜を上げたりしてたんだよ。男ぐらい見たことあるだろうっー話だよ。

「だ・か・ら……箒と話して来なさいって言ってるのよ」

「そんなことしてたら反省文が書けなくなっちまうだろうが！ 今もう十時だぞ、いい子はもう布団の中に入って夢見てる時なんだぞ！ 反省文をもし明日出せなかったらまたあの出席簿を俺の頭に叩き込まれなきゃいけないんだぞ！」

「アンタの自業自得じゃない。それとも何？ せっかくアンタのことを心配してくれてこんな所まで来た箒を無視して泣かせる気？」

「う……………わ、分かったよ。その代りちゃんと書いててくれよ」

「はいはい。 後一発ぐらいは覚悟しといたほうがいいわよ」

「でしょうね。 分かります」

だって後からものすごい殺気が飛んできてるし。

そりゃいやでも自分の身に危険が迫っていると気付く。

今回は自分でも分かるが、100%俺のせいだけど。

「ほう……私よりも反省文の方が大事か？」

「じゃあお前ならどうだ？ 俺と立場が変わってもそんな事を言えるのか？」

「そ、それは…………… / / / / /」

おかしい、何故照れているんだ筈は。

別に照れる要素なんて皆無のはずだが……やっぱり女って良く分かん。

「まあ心配してるのは純粹に嬉しいさ。 ありがとな、筈」

「べ、別にお前の心配などしていない！ 誰がするものか！」

してくれてねえのかよ。

さすがにこの流れはしてなくても言うべきだろう筈さん。 ちよつとは空気読もうとか感じないのかい？

だから君は昔皆から空気をもう少し読もうよとか言われてたんじゃないのかい？

「まあいいや。用事があるんなら部屋来いよ。何か飲み物やるから」

「いや、ここでいい。……いくらなんでも鈴に聞かれるのも恥ずかしい」

「ん？ 今何か言ったか？」

「な、何も言っていない！」

「……………」

「……………」

いくら待っても何も言いださない。
そんな感じすでに3分ぐらいが経過しただろう。
体内時計だから今一正確性が欠けるのが難点だが。

「……箒、用がないなら俺はもう部屋に戻るぞ」

「よ、用ならある！」

いきなり大声を出す箒。

これ箒さんや、いきなり大きな声を出すもんじゃない。

そんなことをしてたら怒られるぞ。地獄の番人、織斑千冬に。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……………」

六月末に行く学年別個人トーナメント。

だがそれはクラス対抗戦とは違い完全に自主参加の個人戦らしい。

学年別で区切られている以外には特に制限はない。

だがそれでも専用機を持っていた方が圧倒的に有利なことは変わらない。

俺は自主参加らしいから出ないことにしようと思っているのだが。

「わ、私が優勝したら

」

頬を紅潮させながらも篤は言葉を続ける。

一体何が恥ずかしいのか、その目は俺を見てはいない。

「っ、付き合ってもらっ！」

「……………はい？」

何かよく分からないが宣戦布告を迫られたようだ。

それが誰に向けてのものなのかは全く見当も付かないけど。

—夏side out

千冬side

ここは学園の地下五十メートルにある場所。

ここはレベル4権限を持つ関係者しか入ることが出来ない。

いや、先日どこかの馬鹿が入った形跡があったがそれ以外はない。

今は完全に破壊された無人機の残骸を運び、アリーナの戦闘映像を

見ている。

もうすでに十回以上は見ているだろう。

「……………」

恐らく今の自分の顔はひどく冷めたものだろう。

まるで一つのこと以外にはまるで興味を示さないような顔。そういう部分はアイツに似てきたのかもしれない。

「織斑先生」

「……山田先生、何か見つかったか？」

「はい。ちょうどこの部分に……ほら、今映りました」

その映像を停止して二人で食っているようにして覗く。

そこに移しだられていたのは、ISとは思えない機体だった。

一夏の使っていた機体と似ている、いや、そっくりだと言ってもいい。

だが明らかに装備されている武器が違う。

右肩にはミサイルのポッドのようなものが付いており、更に左脇に抱えながらも両手で持っている巨大な緑色をしたもの。

恐らくあれからは強力な何かが出るのだろう。

たった一撃でISのコアを一撃で粉碎されられるほど強力な威力を誇るものが。

「これって織斑くんが使っていたISと似ていませんか？」

「ああ……それもISの性能をはるかに上回るほどの機体のようだな」

四時間前、一夏に關係していると睨んだ私はすぐに問いただした。お前はISのコアを破壊した物を知っているのではないのか、と。だが返ってきたのは、酷く冷めたものだった。

『俺は見てもないし知りもしなければ關係もしてはいない。第一に見ていて知っていたとしても何で俺がお前みたいな奴に教えなきゃなんないだよ』

まさかここまで言われるとは思ってもみなかった。

だが何よりも信じ難かったのは一夏の酷く冷めたあの瞳。恨み、怒り、破壊、殺意……そんな思いが含まれていた瞳だった。もちろんすぐに一夏とは別れた。

そうでもしなければ自分は自分でなくなってしまうていたかもしれない。

そんな恐怖に駆られてしまった。

「織斑先生。 やっぱり一夏くんを監視した方がいいんじゃない」

「それは駄目だ山田先生。 それをしたら何が起こるかそれこそ分からない」

山田先生は驚きの目で見てくる。

それでも駄目だ。 もし見つければ、最悪の場合……

「とにかく今は様子を見よう。 それが最善の手だ」

今はそう返すのが限界だった。

……… 一体自分の何がいけなかったのだろう。
今更ながら自分と一夏を隔てている壁の原因を探す自分がいた。

千冬
side
out

第17話（後書き）

これで一巻の内容は終了です。

こんな駄作品を見てくれて、ありがとうございます。

新登場人物設定&新機体設定（前書き）

かなりチートな使用になってしまいました。

新登場人物設定&新機体設定

新登場人物設定

常葉蓮

性別：女

年齢：16歳

身長：162センチメートル

容姿：かなりモテる美人なお嬢様系

一夏の二人目の恋人にして同じ中学出身。

その容姿は男なら誰でも惚れてしまっぐらいで女性から告白されたことも。

性格はとても温厚で優しく、面倒みがとてもよくお姉樣的な存在。そんな性格には似合わず寂しがりやで暗い所が苦手。

ほとんどの人間を嫌ってはいないが織斑千冬と篠ノ之束と両親だけは論外。

だが一夏の事になると少し冷静さを欠き、一夏を馬鹿にしたりする者は容赦なし。

一夏をからかったりすることもあるが、それは単に寂しいだけ。

昔一夏に助けてもらったことをきっかけに一目惚れした。

だが付きあつて間もない頃両親の仕事の都合でドイツへ行くことに。

一夏は蓮の身に何かが起こったと予想しているがそれは2巻で。

4人の転校生の内の一人で一夏と同じクラス。

弾や鈴のことは自分の弟や妹のように大切に思っていた。

戦闘においては遠距離戦が得意だが近距離戦はやや苦手。

戦は普通。

中距離

五反田弾

性別：男

年齢：16歳

身長：175センチメートル

容姿：結構モテるなかなかのイケメン

本来のISならIS学園には来なかったがこの作品では来ることに。
IS学園に来た理由は一夏や蓮や鈴のサポートと敵の排除。

一夏の数少ない心から信頼できる人物であり一夏の良き理解者。
織斑千冬や篠ノ之束のことが大嫌いで口も利きたくないという。

腐ったことが嫌いで女性に対しても容赦しない部分は多々あるが基本的には優しく、すぐに他の人と打ち解けることができる。

小学校時代から姉のことで苦しんでいた一夏を支え続けた一人であり、その経歴で千冬のこととは心の底から存在が不快だと思っている。

一夏は弾に感謝しており、弾の敵は徹底的に潰してきた。彼らの中学ではかなり有名なコンビで不良たちも血相を変えて逃げるくらい強い。

4人の転校生の内の一人で一夏と同じクラス。

とても義理と人情にあふれ、一度恩があれば大抵のことはなんでもする。

一夏同様にこの世界にウンザリしており、世界を変えたいと思っている。

近距離戦が得意だがその他はあまり得意ではない。

新機体設定

ストライクガンダムS A F

製作者：織斑一夏

世代：??? 世代型 ??? 世代型

待機状態：赤色のピース

操縦者：常葉蓮

一夏が他人のために唯一一人で作ったと思われるMS。その性能はフリーダムには劣るもののISや従来の兵器など敵ではない。

機体のベースはストライクガンダム、この機体にもGNドライブが搭載されているがフリーダムとは違い一つしかないがかなりの性能を誇る。

またフリーダムとは違い換装することができ、合計3つの換装が可能。

GNドライブから発生する粒子の色は赤色でもちろんリミッターなども付けている。

フリーダムと同じく今は一次形態。二次形態になるかどうかは今不明。

トランザム状態になることはできるが粒子化することはできない。現三機あるMSの中では三番目の性能らしいが、操縦者である蓮の腕前が国家代表をしのぐほどのものなので実力的には二位に位置する。

このガンダムの存在を知っているのは一夏、蓮、弾の三人である。

機能

『GNドライブカスタム?』

：フリーダムに積んでいるGNドライブとはまた違うGNドライブ。核エンジンなどを使用していないために出力や性能なども見劣りする。

出力に関しては本来のGNドライブの1・3倍から1・5倍ほど。

こちらは一夏がリミッターを掛けていないため、リミッターを掛けているフリーダムのGNドライブとほぼ互角らしいが実際のところは良く分かっていない。

一夏と別れた蓮は少しながらGNドライブを改良し、性能も少し上がったらしい。

『トランザムシステム』

：フリーダムの時とほとんど同じ。

唯一違う所は機体のスペックが5倍ではなく3倍にあがること。

武装

：エールストライクガンダムSAFの時

『GNライフルMK?』

：GNライフルの強化版で現ビーム銃系統最高威力を誇る。

リミッターを掛けていなければあらゆるものを溶かしたり貫通して破壊するため、一夏がリミッターを五つも掛けたぐらいのゲテモノ。普段は右手に持って使うが使わない場合は後の腰の部分に収納する。なぜフリーダムにこれが積まれていないかと言うとただ単純にこのライフルを作るだけでもものすごい金と体力が必要になるため作っていないから積めないとのこと。

蓮は主に射撃がメインのため、一番使う武器らしい。

『GNサーベルMk ？』x 2

：フリーダムのビームサーベルと同じぐらいの威力を誇る。
当然ながらこれにもかなり出力を抑えるためにリミッターを掛けている。

普段は機体の脚の部分にストックされており、必要な時に抜いて闘う。

だがフリーダムのように柄の部分をつな結させ使うことはできない。
2本とも使う場合は両方の手で持って使うのだがその例はあまり見られない。

だが最大出力で使えば間違いなくISの装甲など真つ二つに出来る。

：ソードストライクガンダムSAFの時

『GNストライクブレイド？』

：ソードストライクのメイン武器にして巨大な両手剣。

また刃の部分に圧縮した超強力な圧縮粒子を纏うことも可能。

だがISなど軽々斬れてしまうため、普段は圧縮粒子を纏ってはいないが無人機などが乗っていない物に対してはかなり効果的な武器。

ブーメランのように投げることができ、自分の所に戻っては来るのだが一歩間違えれば自分が大怪我をしたり体が真つ二つになったりするるのでお勧めされない使い方。

使わない時はそのまま背中にもストックすることができる。

『GNロングナイフ？』x 2

：普段は使うことなく腰の部分にストックされている武装。

ナイフと名前が付いているがその大きさは1メートルとかなり大きい。

一夏曰く『長くてもナイフみたいな命名したからナイフでいいじゃん』とのこと。

こちらはストライクブレイドとは違い圧縮粒子を纏うことはできないが、相手に投擲することが可能でホーミングプログラムも搭載されているため攻撃対象に当たるまで半永久的と言ってもいいぐらい当たるまで相手を追尾する。

当たった後は粒子となり、数秒後には腰の部分にストックされている。

：ランチャーストライクガンダムS A Fの時

『GNオーバースター？』

：驚異的な破壊力を誇るランチャーストライクの主力武器。

その威力は測り知れず、あらゆるものをたった一撃で粉碎する。

一夏が絶対に敵に渡したくない武器と言うほど危険な武装で、作った一夏ですら1週間ほど破壊しようかと悩んでしまっぐらいゲテモノ。

リミッターなどを大量に付けても恐ろしい威力を発揮するため余程のことがない限りは使用するなど運は一夏からきつく言われている。

クラス対抗戦の際に侵入した無人機のコアを粉碎したのもこの武装。

『GNミサイルポッド？』

：ランチャーストライクの両肩についているミサイルポッド。

ミサイルには圧縮粒子も入っているため、威力もそこそこはある。

両方合わせて16発ものミサイルを一気に放つことができるが、放ってしまったらミサイルが再装填されるまでに5分ほどかかってしまったため扱いが難しい。

だがその反面命中したISなどに一発につき1分間のバグを発生させる。

一夏はフリーダムにバグ軽減のチップをインストールさせているため他と比べてバグにかかっている時間は短いがそれでも20秒ほどはバグにかかる。

インパルスガンダムS A F

製作者：織斑一夏、五反田弾

世代：????世代型 ????世代型

待機状態：赤色の指輪

操縦者：五反田弾

一夏と弾が共に共同作業をしながら作ったMS。

こちらの性能もフリーダムには劣るが全世界にある現在のISやストライクガンダムよりはまだ性能は上の方………らしいが実際の所は不明。

機体のベースはインパルスガンダム、もちろんこの機体にもGNドライブは搭載されているもののストライクと同じ一つだけだがかなりの高性能。

またストライクと同じく換装することができ、その種類は2つ。

GNドライブから発生する粒子の色は赤色、リミッター有り。

現在は一次形態、ストライクと同じく二次形態は不明。

こちらは一夏がランザム状態時に粒子化が出来る設定を付けたが、回数が3回までと決まっており粒子化した際には少量ながらもシールドエネルギーが減る。

現在あるMS三機の中では2番目の性能、だが弾の操縦テクニクが運よりも劣るため実質は三番手のような感じだがそれでもかなり強い。

機能（GNドライブとトランザムシステムはストライクと同じ）

『VPS装甲展開システム・カスタム？』

：Variable Phase Shift Armor「ヴァリアブルフェイズシフト装甲、これが本来の正しい名称だが長いためVPS装甲と呼ばれている。

このシステムは機体への電力供給による相転移で実体弾兵器に対し絶対的な防御力を生み出す、いわば完全なるチートを実現させるシステム。

だがこのシステムにはデメリット、つまりいくつかの欠点があった。特に一番深刻な問題はVPS装甲を展開するにあたっての激しいエネルギー消費。

本来なら全く気にすることはなかったがどうしてもリミッターを掛けないければならず、そうした場合はシールドエネルギーがあつという間に無くなってしまう。

そこで一夏は特殊なデータチップをかなりインストールすることにより、本来のように全くシールドエネルギーを消費させずにVPS装甲を使うことに成功。

だが目をつけられれば厄介なことになるため普段は使用していない。インパルス同様、フリーダムとストライクにもこのシステムは搭載されており、フリーダムとストライクもVPS装甲を展開することができる。

展開した際は機体の色がすべて黒色に変化する。

『ビーム兵器反射装甲展開システム・カスタム？』

：このシステムはビーム兵器をすべて跳ね返すために一夏が作ったシステム。

VPS装甲同様に使用すれば激しいエネルギー消費を引き起こすが、一夏が別の特殊なデータチップをインストールしたためビーム兵器反射装甲展開時に発生していたエネルギー消費は無くなった。

このシステムをやぶるためには各ガンダムが最大まで性能を引き上げなければならず、それ以外の方法はすべて受け付けない。このシステムも3機のガンダムに搭載されており、展開が可能。また展開した際にはガンダムの色がすべて白色に変化する。だが二つのシステムを同時に展開すれば、ガンダムの色は元の色に戻る。

武装

：フォースインパルスガンダムS A Fの時

『GNシルエットライフルM k ？』

：フリーダムとほぼ同出力のビームを放てる武装。

GNライフルの強化版だが、出力ではストライクのライフルには劣る。

その代りに発射からの速度は3機の中でも一番早い。

だが弾はあまり射撃を得意としないため使われないことが多い。

もちろんリミッターは付けてあるが、その個数は少ない。

『GNヴァジュラビームサーベル』×2

：フォースインパルスのメイン武器にして弾1番のお気に入り武器。

その出力はストライクよりも高いがフリーダムには劣るぐらい。

弾は接近戦が得意なため一番使用される武器でもある。

またラケルタ・サーベルのように連結させて使用することも可能。

戦いにおいての適応力が非常に優れている一品だと弾は評している。普段や勝負中使わない時は脚の部分にストックさせてある。

：ソードインパルスガンダムS A Fの時

『GNシルエットレーザーブレード？』

：ソードインパルスのメイン武器にして弾の2番目にお気に入りの武器。

一本だけでもインパルスと同じぐらいの長さを誇るが片手で扱うことができる。

連結状態にして使えたり、二刀流で使えたりと運用の幅がとても広い。

無人機などの硬度ならばやすやすと真つ二つにすることが可能。

またビーム兵器などを切り裂いたりすることもできもはや万能と言っても過言ではないが、弾があまりソードインパルスにならないため使用されることは少ない。

『GNシルエットブーメラン』

：ほとんど使われないが一応搭載されている武器。

その名の通りブーメランとして使用する。

だが意外にも威力はなかなか、切れ味もそうは悪くないという。

弾自体ブーメランがとても苦手なためにほとんど使われない。

一夏とタッグでの勝負の時には一夏に手渡したりもする。

余談だが一夏がこのブーメランを使えば並大抵の者は敵ではないという。

第18話（前書き）

今回から2巻が始まります。

第18話

一夏side

今日はすでに六月の頭の日曜日。気分はそう悪くない。

今日が日曜日だということもあり、俺は中学時代からの友人の五反田弾と共に俺の家の地下にある他人には絶対に秘密の場所に来ている。

IS学園の外に1日出かけるのに許可をなかなかとれずつい時間がかかった。

「一夏よお、久しぶりに会ったのに以外とそっけないんだな」

「なに言ってるんだよ。インパルスの最終調整をしたいと言い出したのはお前じゃなかったか？それに俺も俺でやることがあるんだから。あゝあ、今日は徹夜だな」

「あれ？確かお前のフリーダムって完成してなかったっけ？」

「無駄に改造した白式を元に戻さなきゃいけないんだよ。最近は色々忙しい用事が入っていたからどうしても出来なかったって所」

こういう部分を見て自分の計画性の無さをつくづく思い知る。いつもいつも大変な目に会ってしまう、自業自得だけど。

だが内心俺は少し嬉しい。いや、結構嬉しいかもしれない。まさか女があまり好きじゃない弾がIS学園に入学してくれるというのだ。

男が俺以外いなくて結構心細かったりするんだよこれが。女の話だったら身だしなみの話とかで全然付いていけない。

でもそんな生活ももうおさらば……だと思いたいけどやはり不安だ。

「お前の計画性の無さにはつくづく呆れるわ」

「そんな俺を気にかけてくれる優しい弾君のこと僕は大好きだよ」

「気持ち悪い上になんだその棒読みの台詞は。言っただったらちやんと感情こめて言えよ。さあ、もう一回」

「そ、そんな弾君、す、好きなんかじゃないんだからね！」

「止めるオオオ！ 猛烈に鳥肌が来た！ 一夏、お前キモすぎるぞ！」

「お前がやれって言ったくせになに言っただがんだ！ 逆さに吊るすぞ！」

他の奴らが聞いたらなんと言っかは知らないがこれは所謂ふざけ合
い。

やはりお互い久々に会えたことが嬉しいようだ。俺は嬉しい。

だが俺達の手は止まっていない。

俺はかなりの速さで三つあるコンピューターにデータを打ち込む。

おかしな所はないか、きちんと性能が引き出せるか、武装はちゃんとあるか等々。

弾も速くはないが正確にデータを打ち込んだり確認したりしている。
この分ならなんとか午後10時までには終わりそうだ。ちなみに
今年午後3時。

「一夏、気分転換かねてテレビつけてくれ」

「自分でやれ。 なんのためにお前には2本の腕が付いている？」

「辛いなあ。 …………… 分かりました分かりました、そんなに睨むな」

顔を引き攣らせた弾は自分で近くにあったりモコンに手を伸ばし、テレビをつける。

…………… そう言えばなぜ俺が自分の家の地下にこんな場所を作ったか言っ
てなかったな。

単純に言えば理由は二つ。 新機体を作るためと機体に慣れるため。
広さも縦横5キロぐらいあるからなかなか広くて快適な空間となっ
ている。

ただずつとそういうことをしていたら飽きるということだテレビも
ある。

入口は俺のクローゼットの中だからばれる心配は一切ない。

学校もちよくちよくサボってここに泊まりきりだったことだってあ
る。

「うわ！ …………… これマジでねえわ……………」

「ん？ どうした弾…………… ぶっ！」

「笑ったな一夏！ テメエ今確実に笑いやがったな！」

「ははははははは！ だってこれお前だろ！ ははは、傑作だ！」

「うおおおおお！ くそ、いざ自分になってみるとキツイもんがある
なあ」

テレビに映し出されているのは結構大きめの弾の顔写真。

そつ、弾は今世界で3番目にISを動かせる男として注目を浴びて

いる。

実際にはMSだから誰でも使えるんだがそれを言えば入学できない。ちなみにもう一人使える奴はフランスの代表候補生だったはず。だがなぜか2番目なのにあまり注目を浴びてはいないらしい。あんまり気にはならないからハッキングもそんなにしてないや。犯罪？ 知らん、ハッキングなんて良くやる手口じゃないか。俺が。

「お前もあんなに人が来たのか？ 各国大使とか科学者とか」

「ああ。 だがお前はまだ少しだけ少ないぐらいだな」

「あれより多いとか考えらんねえ。 人生は経験って本当なんだな」

「どこの爺だ、お前は」

そんな馬鹿な会話をしながら作業を続ける。

それから20分後、あっという間にインパルスの調整が終わった。ちょうど区切りにしたいと思っていたので二人で休憩する。

弾はあまり作業をやっていないような気もするがそこは見逃そう。

「あ、そうそう。 蓮も来るらしいな、IS学園に」

「はあ！？ 俺そんなこと一言も聞いてねえぞ！？」

「なんでも急に來ることが決まったんだと。 今ではドイツの代表候補生だって話だ。 …… てか、なんでお前知らないんだ？ 付き合ってたならメルアドぐらいは知ってるんじゃないのか？」

「……いや、一時メールしようと思ってたんだがつながらなかった」

「あ、そついや蓮の奴携帯変えたって言ってた」

そりゃ電話もメールもできんだろ普通。

それで俺がどれだけ寂しかったかしらないな。

ウサギは寂し過ぎると死んじゃうって言うけどあれ迷信なんだぞ！

「……じゃあなんでお前知ってたんだよ？」

「前に買い物に行ったらたまたま会ったんだよ。一夏によろしくって」

「……それじゃあまた4人がそろつ訳か」

「そう考えたら久々って感じで楽しいな。……あ、そつだ一夏」

「なんだ？」

「もう一人のドイツ代表候補生とフランスの代表候補生には気を付けろだよ」

弾の表情が一気に険しいものになる。

真面目な話だと顔が険しくなるコイツの癖、どうにかならないのか？

「分かった。気をつけとくよ。……それじゃあボチボチいきま
すか」

「そつだな。今日はさつさと寝よう、こつで」

「こつで寝るの！？ 巖さん起こらないのか」

「一夏と一緒にならいざという時任せられるとか言って許可くれたぜ」
買いかぶりすぎだと咄嗟に俺は思う。

そもそも俺がもつと前か力を持っていれば弾も苦しめずに済んだんだ。

弾も敵さんも蘭にも感謝しないとな。

俺が崩れずに済んだのもこの3人の協力があつたからこそだ。

「……それじゃあインパルスの試運転、始めるかねえ」

「がんばれよ。俺は白式の方に手を回さなきゃいけないから」

「さつさと完成させちまえよ、相棒」

「そんなこと分かっているさ、相棒」

それぞれのやるべきことをやるために一旦会話は終了。

それからはひたすらに金属音ばかりが辺りに響く。

……久しぶりだな。明日が来ることを待ち望んでる自分がいるなんて。

そんな事を考えながら作業を進める。気がつけばもう午後7時だった。

一夏 side out

弾 side

「一夏。 ちょっと白式の機体データ見せてくれないか？」

「いいぜ。 ちょうど初期設定まで戻せたところなんだ」

インパルスの調整を終え、一夏の所に歩み寄る。

前々から思ってはいたが一夏はやはり天才の部類にはいる。

このインパルスだって7割方を作ったのは一夏だし、俺の要望通り接近戦に特化した機体に調整してくれたのもほとんど一夏だ。

蓮の持つストライクに関しては一夏完全のお手製だと聞いている。

そんな天才を俺が支えていたと聞いた時には信じられなかった。

あの時の言葉、俺は未だに忘れてはいない。

『お前や鈴、蓮や厳さん達の支えがあつたから俺は俺が保ててるんだよ』

でも一夏、お前は俺に救われればなしだって思っているみたいだがそうじゃない。

俺もお前にかなり救われてきた人間の一人なんだぜ。

お前が気付いていないだけ、多分これからもお前は気付かないだろうな。

そついうとこ、お前はとことん鈍いから。

「？ 弾、データ呼び出せたぞ？」

「……お、おう。 すまねえな、ちょっと考え事してた」

一夏に渡されたデータを見て……俺は絶句した。

一夏が言うにはこの白式、第四世代型の物らしい。

今世界各国は第三世代型のISを作ることに躍起になっている。

この機体は第三世代型を遙かにしのぐ性能を持っているということだ。

それなのに、それなのに、この機体のスペックはあまりにも低すぎる。

「め、滅茶苦茶だろこんなもん。なんつースペックの低さだよ」

もうその言葉しか出てこない。

世界は……これ程までに弱い機体を作るために金をつぎ込んでいるのか。

考えられない。インパルス達の性能を見た俺には信じられない。これならまだ一夏が訓練用に作ったザクやグフの方が強い。

「これで分かっただろ？　口酸っぱく俺がいつもいつもISと戦う時には手加減をしまくれと言っていた意味が。MSとISじゃ勝負にならないんだよ、一生かかっても。特にフリーダムとストライクとインパルスにはな」

「だがそれだけじゃない。一夏が手を加えなかったら射撃系統の武装は完全に使用不可能。これじゃあ一夏の力が十分に発揮されないじゃねえかよ。欠陥機とかもうそんなレベルじゃない、欠陥しかないぜ」

「……哀れだよな弾。こんな玩具みたいな機械のために世界各国は金をドバドバつぎ込んでいるんだぜ。こんな玩具みたいな機械のせいで見下される奴らがいるんだぜ。こんな玩具みたいな機械

のせいで無実の罪をかけられ牢屋で暮らす奴らだつて世界にはいるんだぜ。……………信じられないよ、俺は。自分の尊敬していた姉とその友人に人生をぶち壊されたことが。こんな弱い機械にすりついている大人たちをな」

「……………変えたいよな、こんな狂いまくつた世界を」

「変えるさ、絶対に。それで例え俺が何と言われようと俺は世界を変えたい。俺の姉と友人が世界を狂わせてしまったんだ。再びISの無かつた世界に戻すこともできるさ」

一夏の声には決意の色が見てとれた。……………とても男らしいな、お前は。

俺はそんなお前だからこそ支えてやりたいと思えたんだ。

お前は何かあつても突き進むんだろ？ とな。たとえ自分がボロボロになつても。

たとえ世界中の人間や自分の親友たち、そして実の姉が敵なつたとしても。

手足が千切れたつてお前は止まるなんてことはしないよな。

一度決めたら死ぬまでその道を突き進む、それが織斑一夏なんだもんな。

「俺はもう絶対に立ち止まらないし二度と後ろを向いて逃げる気もない。世界が相手だろうがそんなことはどうでもいい。俺は自分の信じる道をひたすら突き進む。きつと世界中の奴らが俺を悪魔だと罵るだろうが、それでも俺は突き進む。腕が千切れても、足が？ がれても俺は突き進んでいくつもりだ。……………そんな俺で良かったら、お前も付いてきてくれないか。まだもう少し先の未来だが、俺と共に世界を相手にして戦つてはくれないか」

「今更だな一夏。　　ずっと前に言つたる。　　お前を支えるつてよ」

「……その代りに大事な物を失うぜ、お前」

「承知の上だつて言つてんだろ。　　くどいんだよ、お前は」

「俺は自分の姉とその親友に復讐を誓つた男だぞ。　　この二人に關しては俺の手によつて必ず世界から消えてもらう。　　そんな思いを持つた人間だぜ？」

「あれだけ酷い生活をお前に虐げたのはその二人だろ。　　それに中学で俺達の親友だったアイツもIS關連のことで自殺しちゃつたじゃないか。　　俺だつてあの二人は殺してやりたい。　　あの二人のせいで世界は滅茶苦茶になつたんだ。　　お前みたいな思いを抱く奴だつて少なくはないはずだ」

しばしの間、お互いの視線が相手を射抜く。そして不意に当たりの緊張がなくなつた。

「……損な役回りが好みなんだな、弾は」

「お前も人のことを言えた義理じゃないがな、一夏よお」

「付いて来るんならしっかり付いて来てくれ。　　振り落とされんなよ、相棒」

「お前だつてしっかり自分の道を行けよ。　　付いてつてやるからな、相棒」

俺達はお互いの拳を付きだし、合わせる。

この日、俺たち二人は世界を変えようと決意した。

多分それはかなり険しい道だと思う。だが失敗するという気持ちはない。

一夏なら……俺達なら絶対に変えられる。そう思えるんだ。

弾 s i d e o u t

第19話（前書き）

今回は少し短めです。

第19話

—夏side

「うおおおおお！ 急げ弾！ もう全然時間がないぞ！」

「分かってんだよそんな事は！ つーかMS使って飛ぶのはどうだ！」

「そんなことしたら鬼の説教喰らって反省分百枚書かなきゃなんなくなるぞ！」

「どの道説教と反省分は喰らうような感じがするのは俺だけか！？」

「落ち着け弾！ ……………俺達二人は多分地獄を見るような気がする」

「……………だよなあ……………チクショー！ 不幸すぎる！」

よう、読者諸君。 元気にしていたか？ 俺は猛烈に元気だぜ。

まあそこは百歩譲っていいでしょう、毎回思うが百歩も譲る状況は滅多にないぞ。

……………まず今の状況がただ単に遅刻しそうなだけだ。 だが勘違いはするな。

誰が好き好んで鬼の教官の説教を聞かなければならないと分かった上で遅刻などするか。 やるやつはよっぽど脳味噌が腐敗した奴かDMぐらいしかない。

俺は健全なノーマル、しいて言えばSだ。 大抵の奴はSだ！

……すまない、取り乱してしまった。

こんな状況下に陥ったのにもちゃんとした理由がある。

回想シーンにまとめてみたから見えてくれ。なぜこうなったかが分かる。

……こんなことをしても説教からは逃れられないんだけどな。

〓回想シーン〓一夏の自宅にある地下での出来事〓〓

……今は何時ぐらいだろうか、まったく記憶にない。

どうやら俺は眠っていたようだがいっ寝たのかも記憶にない。

弾は……なんか自分の家から持ってきたと思われるハンモックで寝ている。

ちなみに現在時刻は午前3時。最近まで俺がよく起きていた時間帯だ。

俺の傍には元の状態に戻した白式とデータを記録したディスプレイ。それを見た瞬間に思い出した。

昨日弾は10時ぐらいに寝ていて、俺は寝ずに少し白式を改造していたんだった。

改造といっても零落白夜の時に消費されるエネルギーをゼロにしただけ。

チート？　これがチートだったらフリーダムやインパルスにストライクは？

「まあいいや。……問題はフリーダムの方だな……」

俺は自分の首に掛かっている青いペンダントを見る。

持主の俺でもこの機体にもいくつかの疑問を抱いてはいる。

なぜあの時俺が力を欲した瞬間に、この青い機体は俺の元に現れたのか。

なぜあの時俺の中から声が聞こえたような気がしたのだろう。

そして……なぜ……なぜ俺は初めてこのフリーダムに乗った時、一瞬だが懐かしいと感じたのだろ

う。乗るのは確かにあの時が初めてだったはずなのに。

この他にもいくつかの疑問を持つが、極力考えないようにしている。

この機体に支えられてきた部分は多いし、感謝もしている。

今の俺を保つにはこの機体の存在も大きく影響していると自負しているさ。

だがそれ以上にこんな俺のことを支えてくれる親友たちには感謝をしきれない。

弾にしたって、自分の人生がかかって俺についてきてくれると言ってくれた。

鈴は弾達と共に崩れかけたり心が折れ掛けた俺を何度も勇気づけてくれた。

そして……蓮。アイツに言われたあの言葉、あれだけは忘れられない。

『一夏くんは強いね。どんなことがあっても絶対に自分と同じ境遇の人達を見捨てたりしない。守るためには巨大な壁でも壊していくし、巨大な敵にも立ち向かっていく。それでいくら自分が損をしても、自分がどれだけ傷ついてても絶対に止めないし文句なんて

一言も言ったりしない。……そんな優しい一夏くんだから、弾くんや鈴ちゃんや私は……一夏くんのことを支えてあげたい、付いて行きたいって思えるの。確かに一夏くんの考えていることは、世界の偉い人たちから見ればテロリストや犯罪者のような見方をすると思う。でも……一夏くんのようにISによって運命を変えられた人達にとつたら一夏くんは救世主のように見ても取れると思う。未だに私は一夏くんを救世主だと思ってる。とっても優しい、お父さんみたいな人だと思ってるよ。だから忘れないでね、一夏くん。貴方はもう一人ぼっちじゃない。一夏くんは一夏くんの信じた道を行けば大丈夫。例えば世界中の人間が一夏くんの敵になっても私や弾くんや鈴ちゃんは絶対に一夏くんの味方だから」

聞いた瞬間に、思わず涙が流れたのをまだ覚えている。俺のことをそんな風に見てくれている奴もいるんだなって。

「……もうフリーダムを隠している訳にもいかない。これを機にしよう。俺は俺の道、フリーダムを使って世界を変えてみせる」

これを表沙汰に出せば必ず世界から情報提供の指示が殺到する。この前の襲撃事件の後も世界から俺のISに関するデータの提供を求められた。

いくら干渉をされないとはいえ世界各国からなら動かざる終えないというのが教師たちの考えだったようだが、俺は丁重にお断りをした。

さすがに一度目ということもあり引いてはくれたが、また来るだろう。

その内スパイとかも入れてくるかもしれない。すでに一人来るが。

「考えても仕方がない。とりあえずフリーダムの最終調整もかねてあれを作ったりして時間を消費したりでもするか」

気持ちを切り替え、高速でパソコンのキーボードを叩く。

だがこの行為が間違いだったと気付くのはそれから時間が経ってからとなる。

「ん……… やつと終わった。そしてついに完成した！」

どれぐらい時間が経っただろうか。集中していたせいで分からない。

だがそんな事は大して気にもならなかった。

俺が作っていたのは超小型のGNドライブ、それがついに完成したのだ。

今までは両肩辺りに付いており、正直バラーナを使う時には邪魔。そこで俺が一か月前から開発に取り組んでいたのがこの超小型のGNドライブ。

これは本来の大きさとは比べ物にならないくらい小型化されているが、その性能は全くと言っていいほど落ちていない。

これにより内蔵することが可能になり、さっそく内蔵したところだ。ちなみに場所は頭の部分。それ以外に適応な場所は見られなかったためだ。

だかこれによってGNドライブが放出する粒子が更に大量に放出されることに。

さすがに不味いだろうとか言う意見は勘弁願いたい。

「……… 全く気にしなかったがそういや今何時で何分ぐらいなんだ？」

不意に腕時計を見る。そこにあつたのは残酷な現実だった。

……………現在時刻、7時45分。

今、完全に遅刻しておしかりを受けるフラグが経った。

「……………遅刻だあああああああああああ！！」

こうしていきなり俺はドタバタ忙しい日々に戻ることに。

そうだった意味ではいいのだろうが、学制的にはアウトだろう。遅刻しそうなのが自分ながら、そう思ってしまうのだった。

〓〓回想シーン終了〓〓

我ながらお馬鹿だと自虐したい……………今自虐したよな？

などと考えながら走っていると、ようやくIS学園に到着した。だが現実とは残酷なものだ。例えそれが自分たちのミスであつても。

「現在時刻……………8時00分……………完全に遅刻だなこれは」

「やっぱ間に合わなかった訳か。クソッ、もう少し早く起きていれば」

俺が言うのも何だが全くその通りだよ弾くん。

君は俺がどんなに強く起こしてもなかなか起きなかったもんね。最終的には腕の部分展開をした状態で鳩尾を殴って起こしたさ。なにやら文句を言っていたが君が50%悪いんだからね。

「まあここにいても仕方がない。　とりあえず俺の教室に行こう」

「それもそうだな」

とにかくここにいてもまったく問題は解決しない。

そんな感じで俺達は大魔王の待つ俺の教室に向かうのだった。

……行きたくないよ本当は。　でもね、男にはやらなければならない時がある。

今がその時のような気がする。　あくまで気がするだけだけど。

「……………それで、なぜお前ら二人は今日に限って遅れて来る？」

「それに関してはさすがに返す言葉もない。　ただ単に遅刻です織斑先生」

「すみません、結構反省はしてるんで正座といってもいいですか？」

俺達二人は見事に職員室で正座をさせられる。

頭に出席簿アタックと言う名の衝撃を3発連続で受けて。

さすがにその光景には同情的な何かを覚えたのかどうかは分からないが、他の先生方や一人の転校生が同情や哀れと言った感情を含んだ瞳でこちらを見ている。

だがさすがに今回は俺達が一方的に悪いわけで、何も言い返せない。

「まあ今回はこれぐらいで許してやろう。　そろそろ私も行かなければならないしな。　織斑は先に教室に戻っている。　五反田を含めた転校生4人はこちらに來い」

その言葉に従い鬼教官の元に集まってくる転校生4人。

俺はまたお叱りを受けない内に教室へと避難することに。

……余談だが転校生の内一人が男装した女だとは驚きだった。

第20話

一夏side

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

俺が教室に入ってから約三分後の出来事だった。

質問攻めされていた俺だったがようやく解放されたため安心。

それまではざわざわとした雰囲気だった教室が一気に静かになった。さすがは世界最強にして鬼教官の異名を持つ（？）織斑千冬教官兼先生だ。

その人望を少しは分けてほしいね。イヤ、マジで。

昔から殴り合いとか殺し合いとか良くしてたから友達いないんじゃないんだわ。

いくらIS学園に来て少し友達ができたと言っても女ばかり。

なんだか自分で言うのもあれだが少し惨めな気持ちになってくる。

……………やば。何か考えてたら悲しくなってきた涙が出そうになるよ。

8割ぐらいの確率で嘘だけど。2割はマジで泣きそうだけど。

「……………今気が付いたがなんでおろしたばかりのスーツ着いてんだよ」

あれは大事な会議の時にいるからおろしといってくれと頼まれて仕方なくおろしてやった時価一万を超える結構いいスーツだ。

それなのにいきなり使いやがって、話が全然違うだろう。

そのスーツの金の3割出したの誰だと思ってんだよ。俺だよ、俺。

せめてこんなしょうもないホームルームの時ぐらいは前もってあんたが用意してたお古のスーツを着いてくれ。今更な話だけどな。………そういえば学年別トーナメントが今月下旬で、それが終わるとようやく夏服の着用を認めてもらえたりするらしい。何か急に思い出せた……… テキトーで本当にすまん、頭が回らんだ。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにしろ。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは……… まあ下着でも全然構わんだろっ」

「そこは構えよ！ 俺の他にも男がいるんだから下着はさすがにアウトだろ！」

絶対に俺以外の女子もほとんどが思ったり突っ込んだりしただろう。俺や弾がいるんだから下着姿はまずいだろっ下着姿は。

ちなみにIS学園指定の水着は何を思ったのであろうかスクール水着だ。

紺色のアレで絶滅危惧種扱いになっていたが全く見ないもんだからすでに絶滅したとまでささやかれていたのにまさかこんな所で生き延びているとは。

一昔前の弾ならかなり喜びそうだ。たぶん今は関心を示さないはず。

ちなみに学校指定のISスーツはタンクトップとスパッツをくつ付けたような感じの、いたってシンプル・イズ・ザ・ベストみたいな感じのやつなのだ。

なぜわざわざ学校指定のものがあるにも関わらず各人で用意するという面倒なことこの上ないことをするかというと、ISは百人百通

りの仕様へと変化するものなので、早い内から自分のスタイルというものを確立することが大事なんだと。

だが全員が専用機なんかをもらえる訳じゃないのでどこまで個人のスーツが役に立つかは難しい線引きだが、そこはそれ花も恥じらう（俺的にはさっぱり意味が分からない）十代乙女の感性を優先させてのことだと聞いたことがある。

女はおしゃれの生き物だとセシリアが言っていたがさすがに俺もそう思う。

主に昔の出来事とセシリアの話を照らし合わせて見ての話なのだが。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

「（……っっておかしいだろ！ 何気に俺の突っ込みがスルーされたぞー!?）」

……そこは目を瞑ってももいいか。 鈍器を落とされなかっただけマシ。

連絡事項を言い終えた鬼教官は山田先生にバトンタッチする。

ちよつと眼鏡を拭いていたらしく、慌ててかけ直す姿がわたわたししている子犬のような印象だと思ったのはこれまた俺だけではないだろう。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも三名ですー!」

「え……………」

「「「えええええっ!?!」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。

女子のことだからお得意の情報網でもう嗅ぎつけていたと思ったんだが。

俺はハッキングしたから分かったぞ。 あんなセキリティを解除するなどた易い。

「（……いやいやいやいや、俺よちょっと待て。 何気に自分でも何スルー使用としているんだよ。 転校生が四人いてその内の三人がこのクラスだぞ。 明らかに多いだろ。 普通は二人ずつとかではばらせたりするもんだろがよ）」

そんなことを考えていたら、急に教室のドアが開いた。

「……え、マジでこのまま進めるの。 ていうかなぜ誰も疑問に思わないの？」

明らかにおかしいだろおかしいだろおかしいだろ！ 職権乱用もいいところだろ！

「失礼します」

「……………」

「失礼するぜ」

クラスに入ってきた三人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

そりゃそうだ。

だって三人の転校生、その内の二人が男子だったらそうなるだろ。

……出来れば蓮もこのクラスだったら良かったのと思ってしまう俺だった。

「シャルル・デュノアです。 フランスから来ました。 この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願います」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。あっけにとられたのは俺を含めないクラス全員がそうだった。

……弾よ、そう気付かれないように睨むな。 怖いぞ、お前。

「お、男……………」

誰かがそう呟いた。

別に俺っていう前例がいるから驚かなくてもいいと思う。

「はい。 こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

人懐っこそうな顔。 礼儀正しい立ち居振る舞いと中性的な整った顔立ち。

髪は濃い金髪。 黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。

体はともすれば華奢に思えるくらいスマートで、しゅつと伸びた脚。印象は『貴公子』といった感じで、特に嫌みのない笑顔が眩しい。

……デュノア社の社長よ、いくらなんでも無理があるとは思わないか？

骨格は女のそれだし見た目も女（女なんだから当たり前か）だぞ。さすがに俺以外にも気付く奴が出てくるとは思わなかったのかい。

「きや……………」

「はい？」

「きゃあああああああああ

っ！」

ソニックウェーブというやつなのだろう。耳が痛い。

咄嗟に耳をふさいだのにそれでもガンガン音が入ってくる。

何気に今思いついたがこれを発電のエネルギーとかに使えないものか。

資源が不足しがちな現代社会の希望になることを密かに願う。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~~！」

元気なんだな、うちのクラスの女子一同は。

後誰だ、最後にあんまりおもしろくないあのネタを言った奴は。今すぐ止める。ドン引きされたくないのなら止める。

「俺は五反田弾だ。 分からないこともあるし至らない点もあるだろうが、これからはよろしく頼む。 ちなみに一夏に手を出したら容赦はしない」

さっさと終わらせたかったのだろう。 弾が自己紹介をする。 ああ、まだ興奮が収まってないうちに自己紹介とかするなよ。 そんなことを今したら……………

「三人目の男子！ 滅茶苦茶カッコいい！」

「こっちはデュノアくんと違って守ってもらいたい系！」

「何気に友達思いの台詞がまたいい印象！」

ああ、また俺の耳に騒音が入ってくる。 弾、今のはお前のせいだからな。

そしてお前のせいなのに耳を塞ぐな、耳腺をするな。
そしてそれを二つくれ。 来る途中に買っておいた耳腺が無くなっ
たんだよ。

「あー、騒ぐな。 静かにしろ」

面倒くさそうにつぶやく鬼教官兼先生様。

大体弾をこのクラスに入れた貴方の責任でもあるんだぞ。

「み、皆さんお静かに。 まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

いやいや先生、決して忘れていたわけじゃないんですよ。

ただ自分の記憶から消そうとは試みました。 印象が強くて無理だったけど。

そう、もう一人の転校生は見た目からしてかなりの異端である。

輝くような銀髪。 白に近いそれを腰近くまで長くおろしている。
ぶつちやけきれいだとは思うが伸ばしっぱなしなのが残念なところ
だ。

そして何よりも俺の印象に残っているのが左目の眼帯。
医療用のものなんかではなく、ガチでマジな黒眼帯。

どっかの国の大佐辺りがしていそうな感じのアレ。

右目は外国人らしく赤色をしているが、その温度はゼロに近い。言うまでもなく転校生は『軍人』。近寄りたくないタイプの奴だよ。

「……………」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子たちを下らなさそうに見ている。　しいては見下しているといった方が正しいな。

だがそれもわずかなことで、今はもう視線をある一点……………織斑千冬にだけ向いていた。……………ははあ、大体分かったぞこれは。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。　もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。　私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴつと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。　　やっぱりコイツは軍人、しかも千冬のことを教官と呼んでいる時点で恐らくドイツの代表候補生辺りが妥当だろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイト達の沈黙。

続きを待っているようだが、それ以外のことは一向に喋らない。
まるで貝みたいな奴だな。　　いつそ海の底でも暮したらどうだ？
ポル　グラフ　ーも歌詞にしたぐらいじゃないか。　　曲名忘れたけど。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなつた山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに聞くが、返ってきたのは無慈悲で冷たい即答だけだった。
山田先生、さすがに教師が生徒の前で泣いちゃダメですよ。

しまった、すっかりしてたからラウラと目が合ってしまった。

「！　貴様が　」

そう呟きこちらにやってくるラウラ。

…………　ああ、弾が早速動こうとしている。

まあいいか。　　ここで釘刺しとけば下手に近寄ってこないだろう。

そう考えていた時、ラウラが俺の前に歩み寄ってくる。

そして無表情のまま手を大きく振り上げ……………

ガチャガチャン！

無機質な金属音がラウラの前後から聞こえた。

初めの音は俺がライフルを展開し、ラウラの額に突きつけた時の音。
次の金属音は弾がブレイドをラウラの首に当てた音。

「っ！ き、貴様ら……………」

「いきなり平手打ちしようとはやってくれるな。ドイツの方では初対面の奴に向かつて平手打ちをかますのが挨拶なのか？ 別にそれならそれでいいんだが」

「なにが気に入らないで一夏に手を上げようとしてんだ？ ドイツの軍人だか織斑千冬の教え子だか代表候補生だか知らないが勝手なこととしてんじゃないやねえよ」

さすがに二重の意味でクラス中がざわめく。

多分大体の察しがつくだろうからあえて説明はしないでおう。いやゝ、それにしてもぶたれなくて良かった。弾に感謝だな。

「お前には二つの道がある。一つ目はこのまま引いて自分の席に大人しく着く。 もう一つは抵抗して頭に穴を開けられながら首から上を刈り取られること。好きな方を選ばせてやる。ただ後者を選んだ場合は容赦や情けは一切無しだ」

「……………くっ……………」

ラウラは振り上げていた腕をゆっくりと下ろす。

それを確認した俺と弾もそれぞれの獲物をしまった。

クラス中からも安堵の声が至る所で漏れている。

さすがにこの歳で人が死ぬ所は俺もあまり見せたくない。

「…………私は認めない。 貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「認めないままずっといてくれ。 俺自身もあまり認めたくはない

んだ」

そうとだけ言うと俺は自分の席に着席する。

ラウラが驚きの表情でこちらを見ていたが、なにも起きず空いている席に向かう。

良かった良かった。出来れば二度と俺なんかに関わらないでくれ。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬が行動を促す。

言いたいことは色々あるのだが、ここは何も言わないでおこう。なにせこのままクラスにいと女子と一緒に着替えなくてはならない。

それは完全に訴えられる。社会から抹殺される。

なので俺は急いでクラスから移動をしなければならないのだ。ち

なみに今日第二アリーナ更衣室が空いていたはずだ。

「おい織斑。デュノアと五反田の面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「了解です」

やっぱりそうなるだろうとは思っていた。

だがこれは正しい判断だ。女よりも男の俺が見た方がいいだろう。弾はともかく、少なくとも今のシャルルはな。

「君が織斑くんに五反田くん？ 初めまして。僕は」

「そついつのは後回しだ。　女子が着替えるから移動するぞ」

説明しながら行動を実行する。

俺が教室を出るとシャルルも弾も俺に付いてきた。

……さて、これからどうなることか。　今の俺には波乱しか見えな
い。

俺の呟きは誰にも聞こえずかき消されてゆくのだった。

—夏side

第20話（後書き）

微妙な所で区切ってすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3670w/>

IS【インフィニットストラトス】～復讐のフリーダム～

2011年10月9日13時32分発行